野畑春日町遺跡

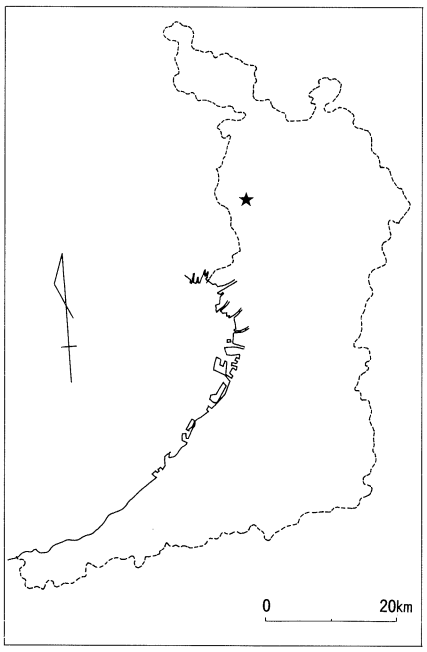
— 第2次調査報告書 —

1988年3月

野畑春日町遺跡発掘調査団

野 畑 春 日 町 遺 跡

— 第 2 次調査報告書 —



1988年 3 月

野畑春日町遺跡発掘調査団

序　　文

大阪府の北部に位置する豊中市は、千里丘陵と、猪名川によって形成された西摂平野の接するところにあるため、比較的変化に富む地勢を呈しています。そして、その千里丘陵の豊かな自然は縄文人に鹿、魚、果実などの動植物を提供し、猪名川の流れは水稲耕作を知った人々に豊かな水を供給し、秋には多大な収穫をもたらしたことでしょう。そのことは、数多く存在する遺跡が雄弁に語っているところであります。

野畑春日町遺跡は千里川をほぼ南北に貫いて流れる千里川の右岸河岸段丘上にあり、従来から弥生時代中期の遺跡としてその存在が知られてきましたが、２回にわたる調査で遺跡のより詳細な性格が明らかになりつつあります。

１次調査で出土した有舌尖頭器、あるいは縄文時代中期の土器は自然に依拠して生きた祖先の姿を彷彿とさせ、縄文時代晩期へ弥生時代前期の遺物の出土したことは丘陵地への弥生文化の波及を考える上で今後に投げかける没紋は大きいと思います。また、２次調査で若干の弥生時代中期の土器が出土したことは従来からの指摘を裏付ける結果となりました。

本書の発刊および出土遺物の公開を通じて市民の皆さんが少しでも郷土の文化財に対する理解を深めて頂ければ幸いと思います。

最後に今回の調査実施にあたりまして多大な御援助および適切な御指導を頂きました関係各位に深く感謝の意を表します。

野畑春日町遺跡発掘調査団

団長　亥野　彊

例　　言

1．本書は豊中市北部図書館（仮称）建設工事に伴なう発掘調査報告書である。

2．調査は豊中市教育委員会社会教育課内に事務局を置いて、1986年10月30日より11月21日にかけて試掘調査を、1986年12月12日より翌年３月17日にかけて全面調査を実施した。

3．本書の執筆および編集は山元建が行なったが、縄文土器に関しては和田秀寿氏（龍谷大学大学院生）、須恵器に関しては林部均氏（奈良県立橿原考古学研究所）、木下亘氏（同研究所嘱託）の助言を頂いた。記して感謝する。

4．遺構・遺物の整理は主に山元があたったが、佐々木聖子、酒井泰子、今井直美、内藤万里栄、潮平ゆうこ、奥野豊子、三村多喜子の協力の得た。記して感謝する。

5．発掘調査にあたっては、水野豊、大西博和の協力を得た。記して感謝する。

6．本書の図面の方位は全て磁北である。

7．遺物観察表の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・日本色彩研究所　色票監修）によった。

本　文　目　次

Ⅰ　調査に至る経過

1　調査の契機……1

2　調査団の構成……1

3　調査日誌抄……2

Ⅱ　位置と環境……3

Ⅲ　調査の概要

1　遺跡の立地……7

2　調査区の設定……7

3　基本層序……8

Ⅳ　遺　　構

1　土壙墓……11

2　土　坑……12

3　溝……15

4　自然流路……16

Ⅴ　遺　　物

1　縄文時代中期の遺物……19

2　縄文時代晩期の遺物……19

3　弥生時代前期の遺物……22

4　弥生時代中期の遺物……23

5　須恵器・土師器……23

Ⅵ　ま　と　め

1　縄文時代中期……29

2　縄文時代晩期……29

3　弥生時代前期……29

4　弥生時代中期……30

5　古墳時代以降……30

図　版　目　次

図版１　(1)　調査区遠景
　　(2)　調査区全景（西部）
図版２　(1)　調査区全景（南東部）
　　(2)　調査区全景（北東部）
図版３　(1)　ＳＸ－１（礫除去前）
　　(2)　ＳＸ－１（礫除去後）
図版４　(1)　ＳＸ－２（礫除去前）
　　(2)　ＳＸ－２（礫除去後）
図版５　(1)　ＳＫ－１
　　(2)　ＳＫ－５～９
図版６　(1)　ＳＫ－11
　　(2)　ＳＤ－２断面
図版７　(1)　自然流路
　　(2)　自然流路断面
図版８　(1)　縄文土器（中期）
　　(2)　縄文土器（晩期）
図版９　　弥生土器・須恵器・土師器

挿　図　目　次

第１図　調査前風景……1
第２図　調査風景……2
第３図　西摂地域……3
第４図　野畑春日町遺跡出土有舌尖頭器…3
第５図　箕輪遺跡（弥生時代）……4
第６図　新免遺跡出土人面付土製品……4
第７図　大塚古墳第２主体部東槨……4
第８図　周辺遺跡分布図……5
第９図　御獅子塚古墳くびれ部……6
第10図　上津島南遺跡木棺墓(平安時代)…6
第11図　周辺地形図（２万分の１）……7
第12図　調査区周辺図……8
第13図　遺跡周辺旧地形模式図……8
第14図　調査区範囲図……9
第15図　調査区断面（南壁）……10
第16図　基本層序模式図……10
第17図　ＳＸ－１・２平面図・断面図……11
第18図　ＳＰ－１遺物出土状態……12
第19図　ＳＫ－11東西断面……12
第20図　ＳＫ－１～９・ＳＤ－１平面図
　　・断面図……13～14
第21図　ＳＫ－11・ＳＤ－２断面図……15
第22図　ＳＤ－２上部大甕出土状態……16
第23図　ＳＫ－11・ＳＤ－２平面図…17～18
第24図　縄文土器（中期）実測図……20
第25図　縄文土器（晩期）実測図……21
第26図　縄文土器(晩期)・石鏃実測図……22
第27図　弥生土器（前期）実測図……24
第28図　弥生土器（中期）実測図……25
第29図　須恵器実測図……26
第30図　須恵器実測図……27
第31図　縄文晩期後半～弥生中期初頭の
　　土器編年……29
第32図　調査区全体図……31～32
第33図　調査区断面図（調査区南壁）
　　……33～34

表　目　次

第１表　調査日程表……2
第２表　土器片出土点数……19
第３表　縄文土器（中期）観察表……20
第４表　縄文土器（晩期）観察表……23
第５表　弥生土器（前・中期）観察表……25
第６表　須恵器・土師器観察表……28

Ⅰ．調査に至る経過

1．調査の契機

野畑春日町遺跡は第２次大戦直後、藤沢一夫氏らによって弥生時代中期の土器片を含む遺物包含層が確認され、その存在が知られるようになった遺跡である。[1] その後長らく発掘調査がなされなかったが、遺跡の範囲内に位置する府営野畑住宅の老朽化に伴う建替えが計画され、地下の遺構が破壊される恐れが生じたため、1986年４月～６月に春日町４丁目10番地内において発掘調査を実施した。その結果、縄文時代中期・弥生時代前期の土器、須恵器および有舌尖頭器が出土し、遺構としては縄文時代中期(?)の土壙墓等が確認された（第１次調査[2]）。

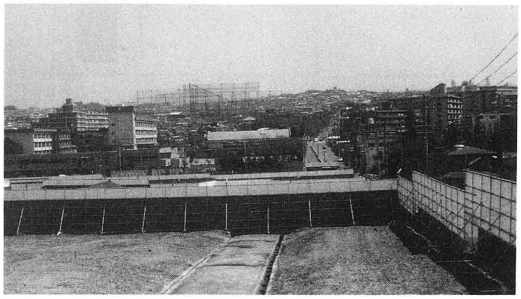
その後、第１次調査地点の東100ｍで豊中市立北部図書館（仮称）の建設が計画され、埋蔵文化財の存在が想定されたため、1986年10月30日より11月21日にかけて４本のトレンチを設定し、試掘調査を実施したところ、西側の２本のトレンチにおいて斜面に堆積した状態で縄文時代晩期、弥生時代前期の土器片、須恵器等を含む遺物包含層を確認し、調査の必要性が生じるに至った。今回の調査は包含層あるいは遺構の存在が想定される図書館の建設予定地の西半部1140㎡について1986年12月12日より翌年３月17日にかけて行なったものである。なお、調査対象地は豊中市春日町４丁目11番地にあたる。

2．調査団の構成

団　　長　亥野　彊　　豊中市教育委員会社会教育課文化財担当嘱託

調査担当者　山元　建　　〃

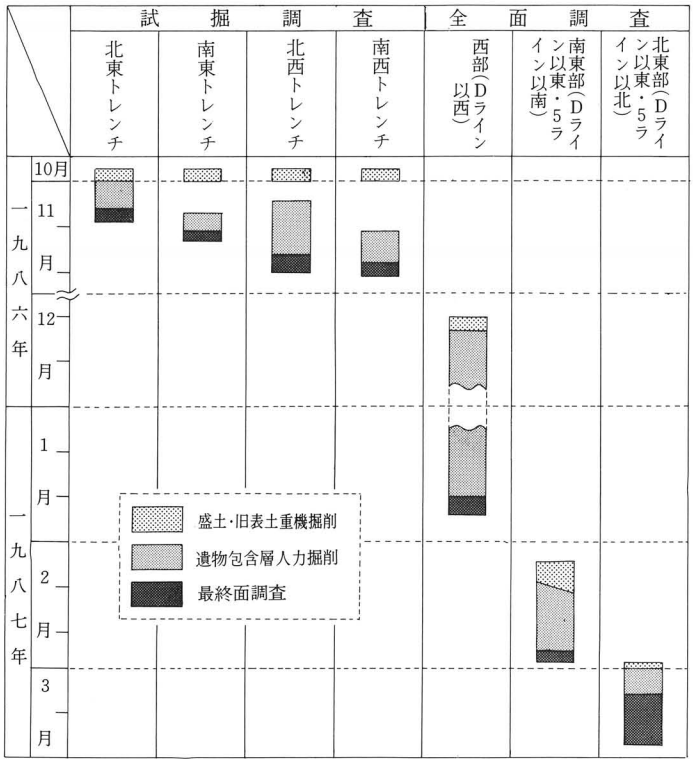
事　務　局　豊中市教育委員会社会教育課内



第１図　調査前風景（西方第１次調査地点より）

第2図　調　査　風　景

第1表　調　査　日　程　表



3．調査日誌抄

調査は第1表に示す日程で行なった。まず1986年10月30日より11月21日にかけて試堀調査を実施し、南西トレンチにおいて遺物包含層を確認し、地山面まで掘り下げたが、北西トレンチは2層上面を検出するにとどめた。なお、北東・南東トレンチは旧地表面下に茶灰色系の砂質土が厚く堆積していたが何ら遺構・遺物を確認できず、全面調査は実施しなかった。

全面調査は1986年12月12日より翌年 3月17日まで行なった。調査は重機で掘削した盛土・旧表土が膨大な土量にのぼり、その置き場を確保するため、調査地を西部（Dライン以西)、南東部（Dライン以東・5ライン以南)、北東部、（Dライン以東・5ライン以北）に分割して進めた。

注1）『豊中市史』第1巻　1961.3

2）『野畑春日町遺跡 ― 第1次調査報告書 ―』野畑春日町遺跡発掘調査団　1987.3

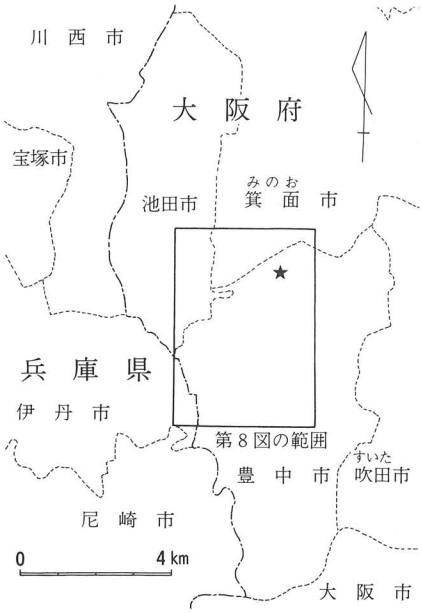
Ⅱ．位置と環境

野畑春日町遺跡の所在する豊中市を中心とした西摂地域は地勢的に見て、千里丘陵・豊中台地・西摂平野の三つに大別できる。市内北部の大半は千里丘陵の西半部にあたり、1960年代以降の開発が進む前は一面竹林・松林であったところである。その千里丘陵をほぼ南流する千里川等の浸食作用によって形成された標高25～30mの段丘面が豊中台地で、ほぼ市の中央部に位置する。また、市の西部～南部は猪名川・神崎川等の沖積作用によって形成された西摂平野が広がっている。

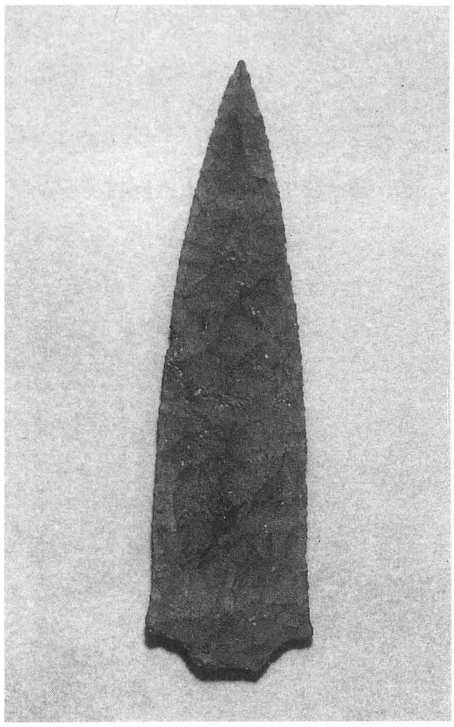
このように比較的変化に富む地勢を有する豊中市周辺には数多くの遺跡が存在し、豊中市蛍池西遺跡・箕輪遺跡・大塚古墳墳丘内・柴原遺跡のナイフ形石器はその初源が１万年以上前の旧石器時代に遡ることを示している。

続く縄文時代の遺跡としては、当遺跡の他に豊中市野畑遺跡（中期末～後期前半）、柴原遺跡（晩期）、箕面市稲遺跡（前期）、瀬川遺跡（前期・後期）など千里川流域とその周辺に多く認められる。ただ、晩期後半を中心とした遺跡が伊丹市口酒井遺跡、尼崎市園田競場場付近猪名川川床・上ノ島遺跡など平野部に多く出現し、既に水稲耕作が一部で始まっていたようであり、豊中市山ノ上遺跡の溝から弥生前期の土器と晩期・突帯文土器（長原式？）の両者が混在して出土したことは興味深い。

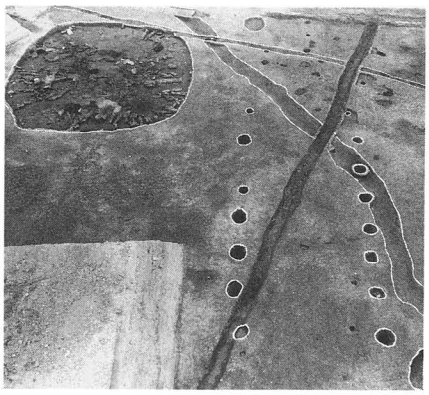
弥生時代に入ると平野部を中心に遺跡は急増する。池田市宮ノ前遺跡（中期）、川西市加茂遺跡（中・後期）、豊中市蛍池西遺跡（後期）・箕輪遺跡（後期）・箕輪遺跡（中・後期）・山ノ上遺跡（前～後期）・新免遺跡（中・後期）・穂積遺跡（後期）・小曽



第３図　西摂地域

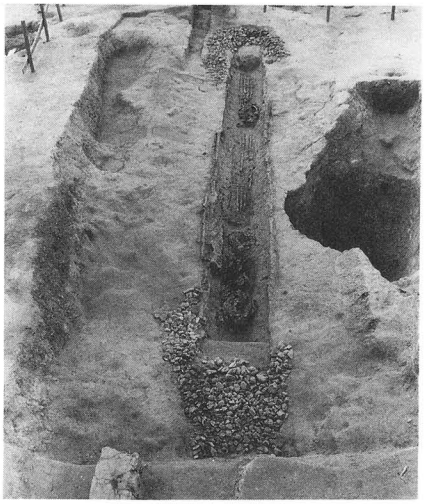


第４図　野畑春日町遺跡出土有舌尖頭器



第５図　箕輪遺跡（弥生時代）

第６図　新免遺跡出土人面付土製品



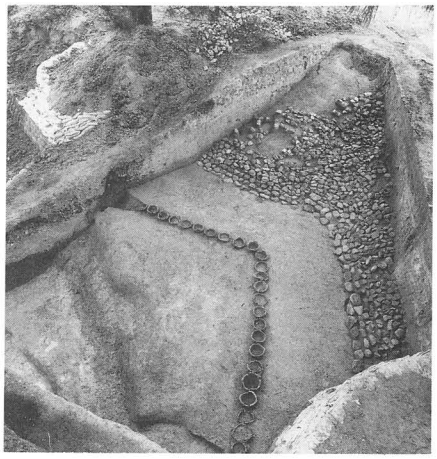
第７図　大塚古墳第２主体部東槨

根遺跡（前・中期）・勝部遺跡（前・中期）、尼崎市田能遺跡（前～後期）・上ノ島遺跡（前期）などがその例としてあげられよう。また、箕面市如意谷遺跡、宝塚市満願寺・中山、川西市栄根、伊丹市中村、豊中市原田神社境内・利倉遺跡から銅鐸が出土しており、池田市五月山山頂遺跡、豊中市待兼山遺跡はいわゆる高地性集落であろう。なお、新免遺跡は千里川を臨む河岸段丘上に位置する大集落で、人面付土製品など吉備地方との交流を示す遺物が散見される他、朝鮮半島の無文土器も確認されている。

古墳時代に入ると、宝塚市万頼山古墳・長尾山古墳・安倉古墳、池田市茶臼山古墳・娯三堂古墳、豊中市待兼山古墳・御神山古墳などの前期古墳がまず山麓や丘陵端部に出現する。前期末から中期にかけては豊中市桜塚古墳群が知られ、大塚古墳・御獅子塚古墳では粘土槨内外から甲冑等の鉄製武具、楯などが多く出土している。また、尼崎市から伊丹市にかけて分布する猪名野古墳群も中期の古墳群であり、豊中市利倉南遺跡では小方墳の存在が確認された。後期古墳は箕面川を臨む河岸段丘上に存在する箕面市桜古墳・中尾山古墳、池田市狐塚古墳・二子塚古墳、あるいは山地に位置する群集墳である宝塚市雲雀山古墳群などが知られ、池田市鉢塚古墳は巨大な横穴式石室を有する上円下方墳として著名である。また、穂積遺跡からは円筒埴輪・形象埴輪を立て並べた円墳跡が見つかっており、低地にも後期古墳のあったことが確認された。なお、豊中市太鼓塚古墳群は須恵器の陶棺を内部に納めており、付近一帯に広がる桜井谷古窯跡群に関係する人々の墳墓と考えられる。当時の集落はまだ判然としない点が多いが、豊中市利倉西遺跡、庄内式土器で知られる庄内遺跡などが海岸線近くに点在し、豊中台地上においても山ノ上遺跡などが知られる。また、豊中市本町遺跡

1．野田塚古墳
2．狐塚古墳
3．二子塚(稲荷山)古墳
4．中尾塚古墳
5．太鼓塚古墳群
6．稲遺跡
7．野畑遺跡
8．**野畑春日町遺跡**
9．瀬川遺跡
10．待兼山古墳
11．待兼山遺跡
12．宮の前遺跡
13．蛍池北遺跡
14．桜井谷石器散布地
15．内田遺跡
16．紫原遺跡
17．桜井谷窯跡群
（◉現存　◎消滅）
18．上野遺跡
19．蛍池西遺跡
20．御神山古墳
21．箕輪遺跡
22．金寺山廃寺
23．新免宮山古墳群
24．本町遺跡
25．新免遺跡
26．山ノ上遺跡
27．下原窯跡群
28．原田神社銅鐸出土地
29．桜塚古墳群
30．小石塚古墳
31．大石塚古墳
32．大塚古墳
33．御獅子塚古墳
34．南天平塚古墳

第8図　周辺遺跡分布図



第９図　御獅子塚古墳くびれ部

第10図 上津島南遺跡木棺墓（平安時代）

・柴原遺跡・新免遺跡からは須恵器の未完成品が出土し、その数は膨大なものになる。これらの集落は、先述した桜井谷古窯跡群で生産された須恵器の集積・選別あるいは搬出に関わる集落であったと考えられる。

７世紀に入ると各地の豪族は古墳造営に費した労力を寺院建立に向け始め、豊中市域では飛島時代末の創建と考えられる金寺山廃寺が知られる。

律令制下では西摂平野はほぼ猪名川を境にして豊島（とよしま）・川部（かわべ）両郡に編入される。上津島（こうづしま）南遺跡からは重圏文軒丸瓦、銅鈴等が出土しており、豊島郡衙に関係する遺跡であった可能性も説かれている。また、柴原遺跡・曽根遺跡では奈良時代の掘立柱建物が検出されている。平安時代になると先述した上津島南遺跡で掘立柱建物・墓などを検出しており、山ノ上遺跡では院政期頃の寺院跡が確認されている。

中世の遺跡は、当時の榎坂郷内に存在する豊中市小曽根遺跡・穂積遺跡などを確認しており、それらの遺跡の調査成果は、市内今西家に残る「榎坂郷田畠取帳」と照合が可能であり、中世村落の実態をより具体的に解明できるものと考えられる。

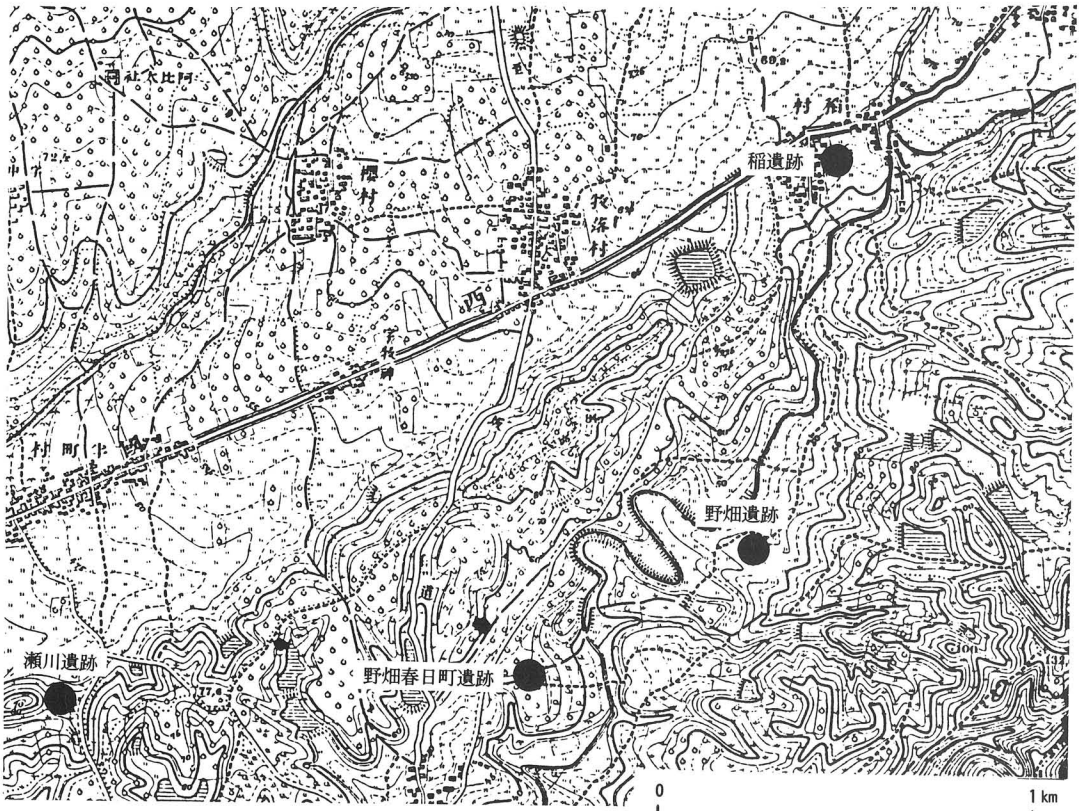
Ⅲ．調査の概要

１．遺跡の立地

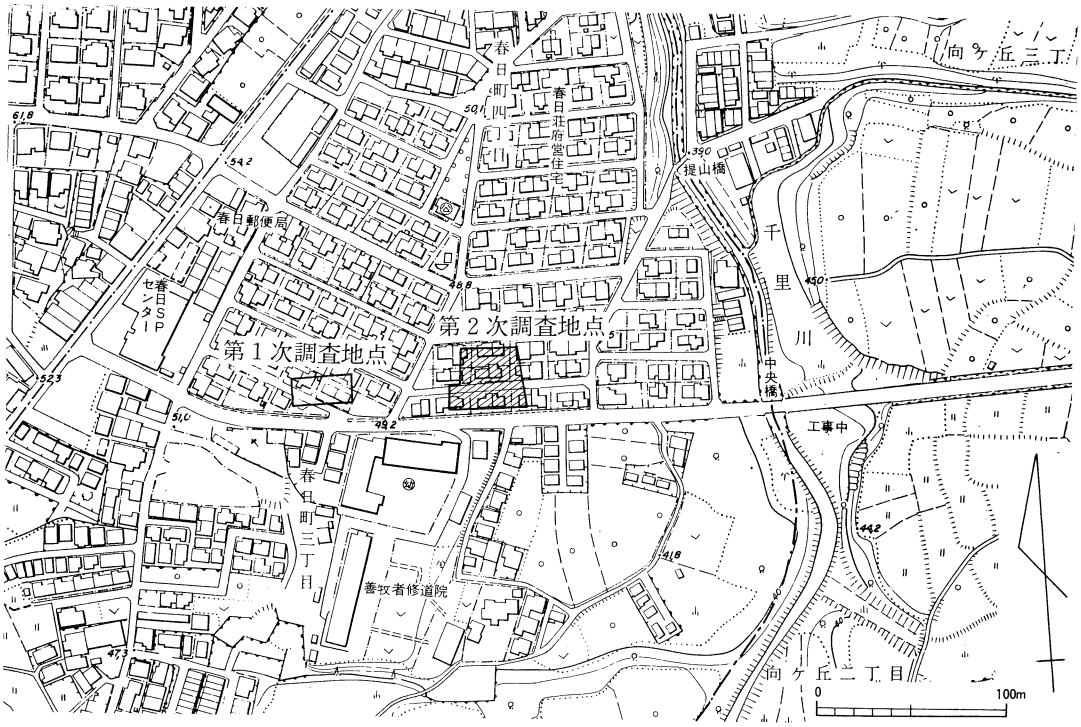
野畑春日町遺跡は、豊中市の北部、現在の地名では豊中市春日町４丁目にあたり、地理的には、吹田市から豊中市北部にかけて広がる千里丘陵の西端付近をほぼ南北に貫いて流れる千里川の右岸にあたる（第11図・図版１）。さらに詳細に遺跡の立地する地形を観察すると、東側と南側に蛇行する千里川が流れ、西側には小谷を有する独立台地状の地形を呈し、千里川中流域においては比較的平坦な地形を形成している。後述するように今回の調査区の西半部の旧地形は第１次調査地点から続く平坦面であるが、中央部には千里川に向かって落ちる斜面が認められ、さらにその東側には再び平坦面が広がっている。上・下の両平坦面とも中位段丘面にあたるものと考えられる。

２．調査区の設定

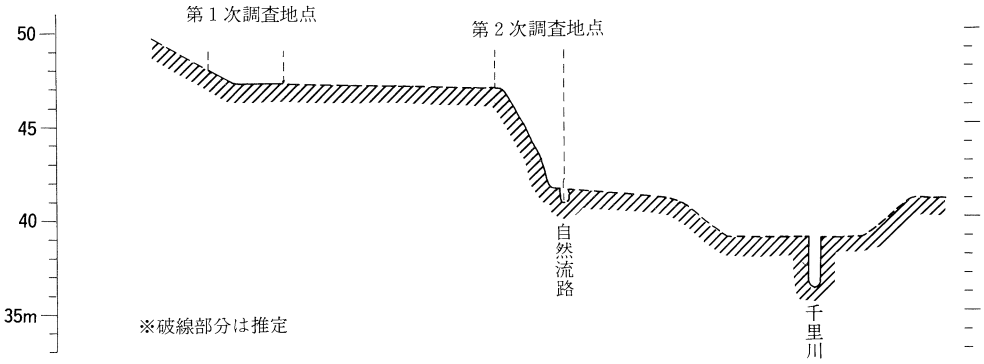
今回の調査区は市立北部図書館建設予定地の西半部にあたり、その面積は1140㎡を測る。調査区内は直行する南北、東西ラインによって一辺５ｍの区画に分割し、南北ラインは東からアルファベット（Ａ～Ｈ）で、東西ラインは北からアラビア数字（１～７）で示し、各区画は北



第11図　周辺地形図



第12図　調　査　区　周　辺　図

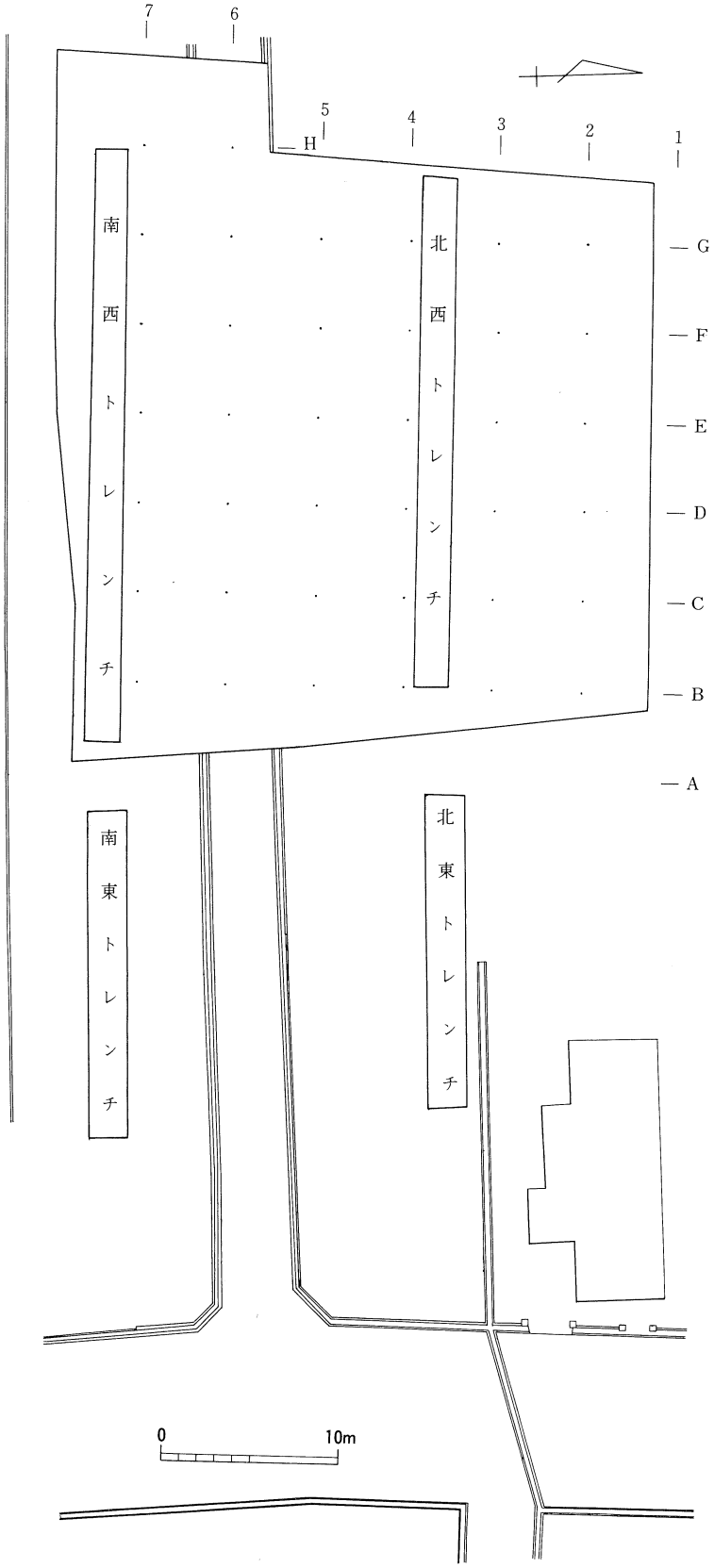


第13図　遺　跡　周　辺　旧　地　形　模　式　図

東交点の座標をもって呼称した（例・A－1区、B－2区）。なお、ラインは調査区の壁面を基準に設定したため磁北とあわず、その方向はN－3°30′－Eである。(第14図)

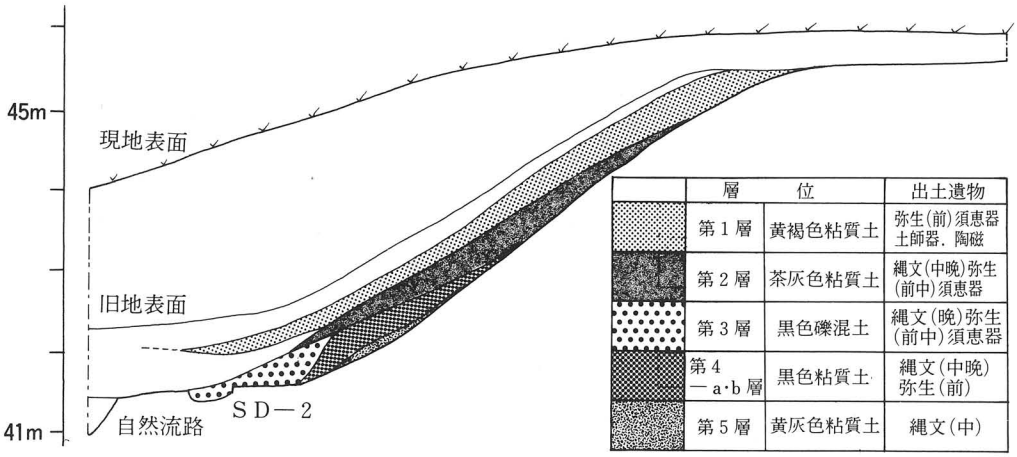
3．基本層序

調査区の基本層序は第 6図に示すとおりである。先述したように今回の調査区は幅約10m、高さ約3mの斜面を挟んで東西に平坦面が広がっている。両平坦部は地山の直上に近年までの耕作土もしくは現代の整地に伴う盛土が堆積しており、遺物包含層は全体に希薄である。特に上方（西側）の平坦面は整地の際にかなり大規模に削平を受けたようであり、全く遺物包含層は認められず、地山面自身もあちこちで攪乱を受けていた。



第14図　調　査　区　範　囲　図

第15図　調査区断面（南壁）



第16図　基　本　層　序　模　式　図

遺物包含層は斜面を中心に認められ、旧表土盛土を除く各層は第16図でその概略を示す。これらの層立のうち、第３層、４－ｂ層、５層は各々古墳時代後期、縄文時代晩期～弥生時代前期、縄文時代中期の１次的な流出土と考えられ、２層は４層に似た有機質の層であるため、おそらく上方の遺物包含層が古墳時代後期後に２次的に流出・堆積したものと考えられる。なお、４－ｂ層は３ライン付近より北へは広がらず、かわってｂ層上に堆積する形で４－ａ層が認められる。両層はａ層がやや漆黒色を呈する以外差はなく、ｂ層同様縄文時代晩期～弥生時代前期頃の遺物包含層と考えられるが、遺物は突帯文土器が１点（第25図８）出土したにとどまる。

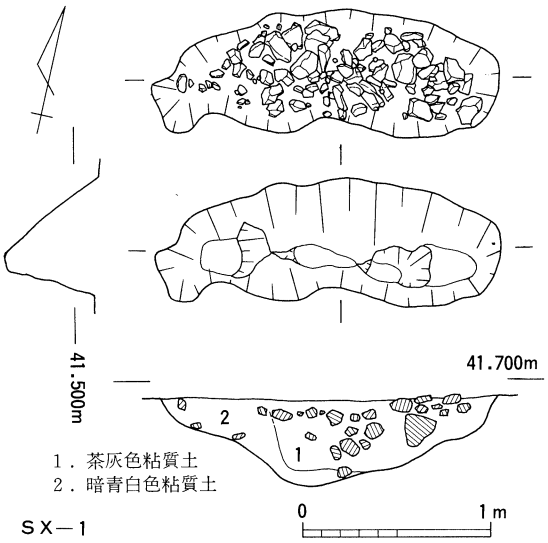
Ⅳ 遺　構

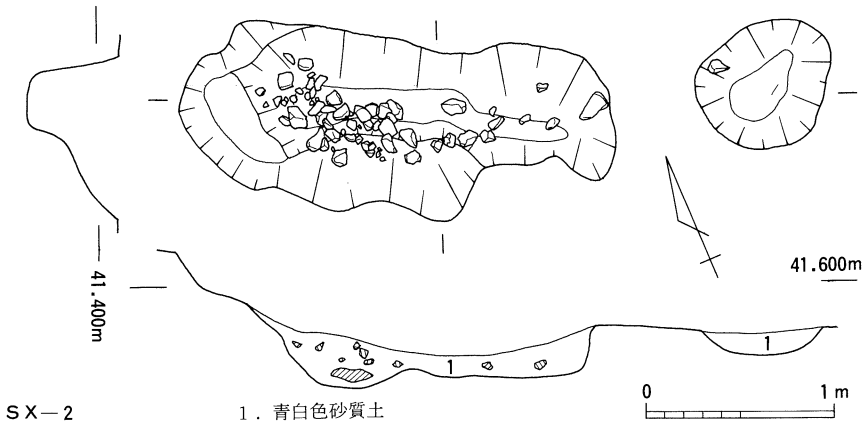
調査区東部の斜面下半部およびその下方の平坦面で若干の土坑、溝、ピットおよび土壙墓を検出した。なお、調査区東壁に沿う形で自然流路も認められた。

1．土壙墓

ＳＸ－１（第17図・図版３）　Ｂ－５区の斜面下方の標高41.6m付近の平坦面で検出した土壙墓で長さ1.8ｍ、幅0.65mの楕円形を呈し、深さは0.45mを測る。主軸はＮ－77°－Ｅである。墓坑の各壁面はかなり急に落ち込むが東西両端部では肩部から約20cmでゆるやかなテラス状の段部が認められ、底面はかなり狭く、明確な平坦面を設ける意識はあまりなかったようである。なお、墓坑のほぼ全面にわたって埋土中から直径５～15cm程の礫を多量に検出した。

ＳＸ－２（第17図・図版４）　Ｂ－６の斜面がその下方の平坦面へ移行する標高41.5m付近に位置する土壙墓である。長さ2.35m、幅0.95mのいびつな楕円形とでも言うべき形状を呈し、その主軸はＮ－68°－Ｗである。なお、深さは遺構が斜面にあることが影響して東側肩部で30cm、西側肩部で70cmとかなり差がある。墓坑はその西辺から南辺東部にかけては





第17図　ＳＸ－１・２平面図・断面図

肩部から約30cm下方で一旦段を設けて底部に至る形状を呈しており、そのためその部分だけ平面形においてもやや外方に広がる傾向が強い。特に西辺部ではその段の部分にやや傾斜を有するテラス状の面が認められた。底面は若干凹凸はあるものの平坦面を形成し、その高さは約41.1mである。また埋土中には直径5～15cmの礫が東部を中心に集中して認められた。なお、墓坑の東40cmで直径70cm、深さ15cmのピットを検出したが、ＳＸ－２との関係は不明である。ただその埋土はＳＸ－２と同じ青白色砂質土である。

ＳＸ－１・２とも斜面に対して主軸を直交することを意識して築かれたと考えられる。なお、ＳＸ－１の北方６ｍで礫の集中する不定形の浅い遺構が確認され、ＳＸ－１・２と同様の遺構であった可能性がある。

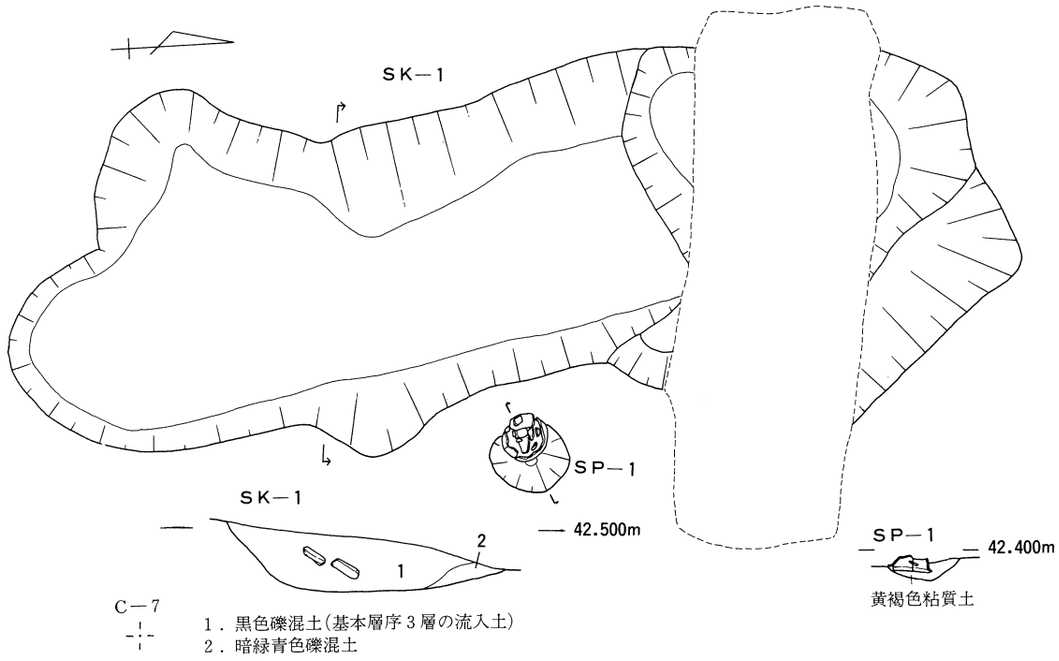
２．土　坑

ＳＫ－１（第20図・図版５）　Ｃ－６～７区にかけて第４－ｂ層上面で検出した土坑で長さ2.8ｍ、幅0.8ｍを測る。深さは遺構が斜面に位置するため、東西辺でかなり差があり、斜面上方にあたる西辺肩部からでは50cmを測るが、東辺肩部では10cm余にすぎない。底面は平坦である。遺物は出土しなかったが埋土が第３層の礫混黒色粘質土であることから古墳時代の遺構と考えられる。なおＳＫ－１のすぐ東で直径20cm、深さ10cmの小ピット（ＳＰ－１）を検出し、底面より浮いた状態で弥生前期の甕が口縁を下にした状態で埋置されていた。(第18図)

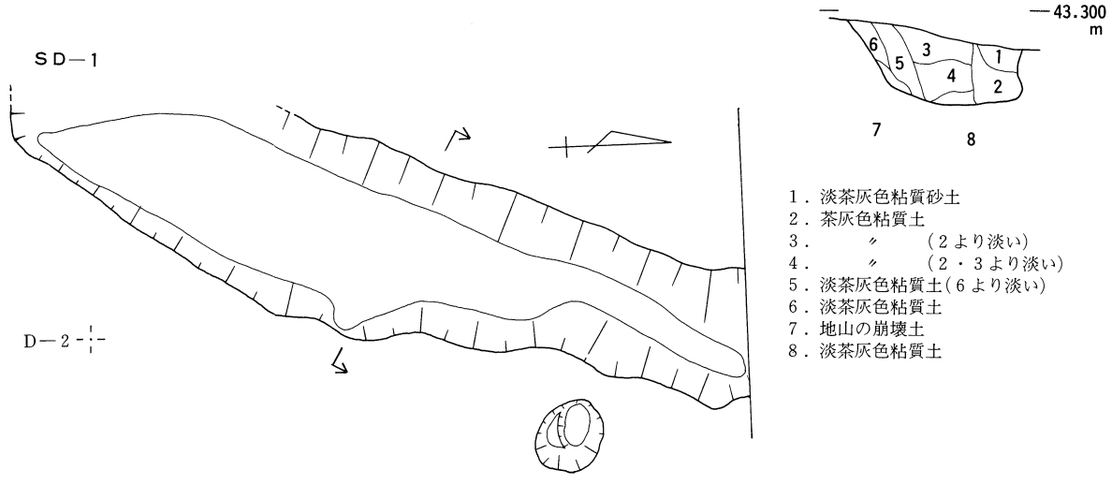
ＳＫ－２～10（第20図・図版５）　５ライン以北の斜面下半部（標高42～43m）において多くの土坑を検出した。これらの土坑は規模・形態にかなりバラつきがあり、性格等は明確にし得ない。ただ、ＳＫ－６・７・９は42.25ｍの等高線付近に南北に2.2mの間隔をおいて並び、その形態も一辺1.4ｍの方形であるなど共通点が多い。特に６・７は土坑の斜面上部側を削って底面を平坦になるように掘削されており、同一の性格が考えられる、なお、ＳＫ－７の底面に数ヵ所の小ピットが認められたが、いずれも深さ３～５ｍで柱穴とは考え難い。これらの土坑の時期は遺物が皆無であるため明確にし得ないが、いずれの土坑も第４－ａ・ｂ層を除去し

第18図　ＳＰ－１遺物出土状態

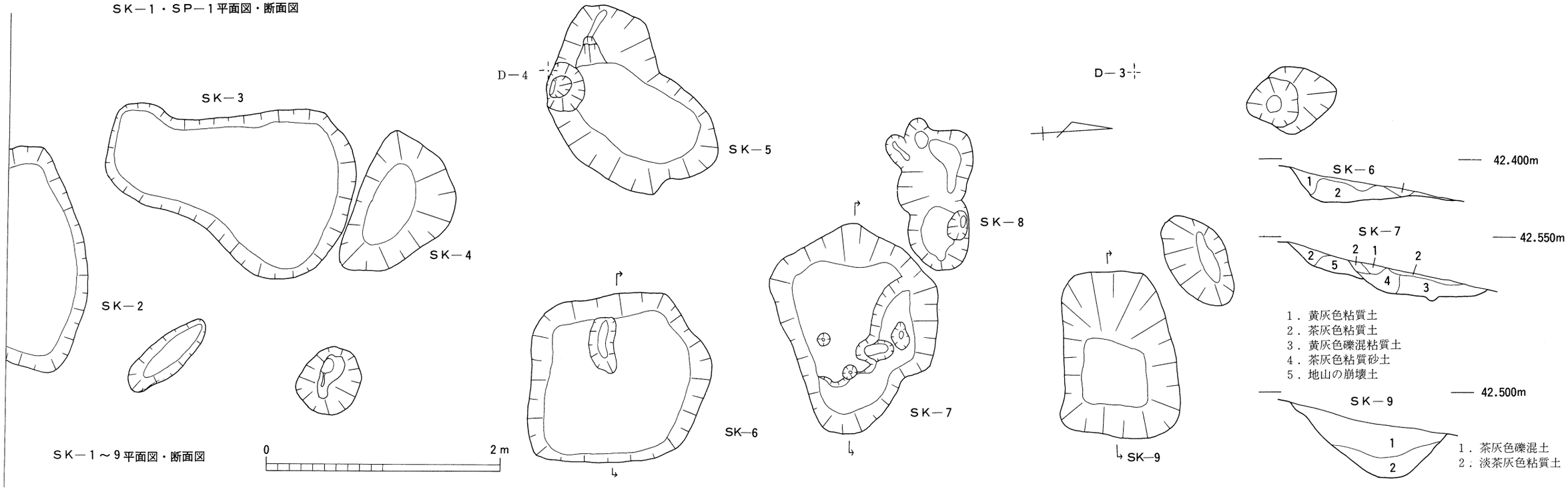
第19図　ＳＫ－11東西断面



ＳＫ－１・ＳＰ－１平面図・断面図

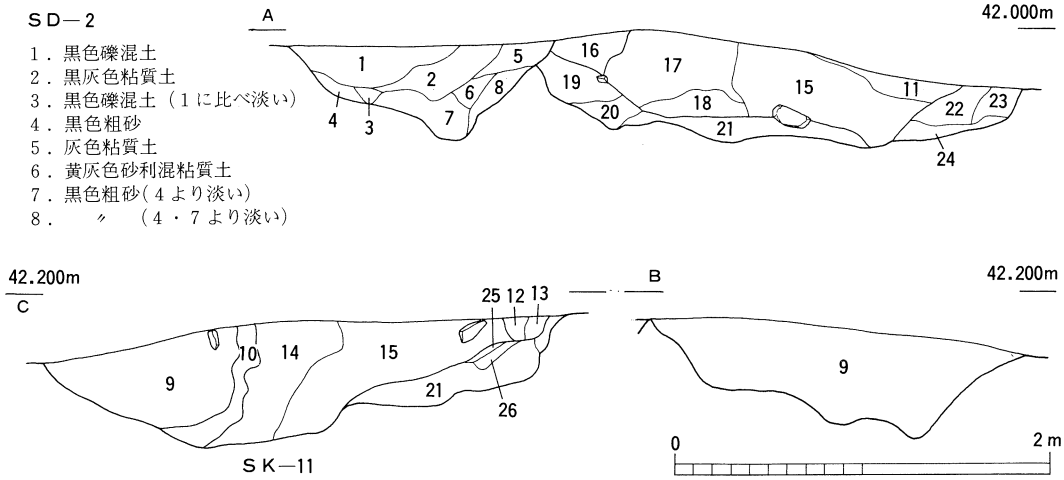


ＳＤ－１平面図・断面図



ＳＫ－１～９平面図・断面図

第20図　ＳＫ－１～９・ＳＤ－１平面図・断面図



9．黒色粘質土
10．淡黒灰色粘質土
11．淡茶褐色粘質土
12．淡黒灰色粘質土
13．　〃　(6よりしまる)
14．淡茶灰色粘質土
15．淡茶灰色砂利混粘質土
16．淡緑灰色シルト
17．淡茶灰色粘質土(14とほぼ同層)
18．黒灰色粘質土と茶灰色粘質土の混在土
19．淡黒灰色粘質土(10とほぼ同層)
20．黒灰色粘質土
21．　〃
22．淡黒灰色粘質土
23．淡緑灰色シルト
24．淡黒灰色粘質土
25．黒灰色粘質土
26．淡茶灰色粘質土

第21図　SK－11・SD－2断面図

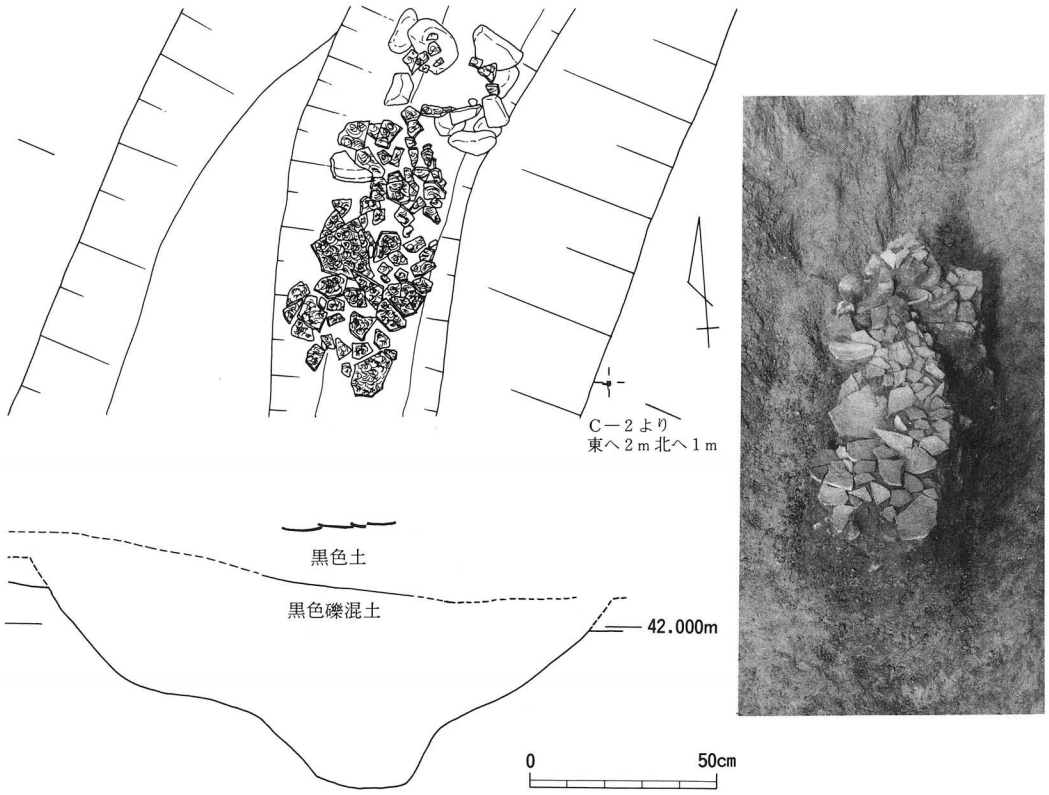
た段階で検出したため縄文晩期の遺構である可能性が強い。

SK－11（第19・21・23図・図版6）　B－1・2区にかけて検出した直径約2.8mの円形に近い土坑で、深さは約70cmを測る。埋土は南北断面では上層から黒色粘質土、淡茶灰色砂利混土、黒灰色粘質土と堆積した状態が認められた。その堆積状況は1次調査で検出した弥生時代前期のSK－7と似ている。ただ、SK－7と違い各層ともかなり乱れた堆積を示しており、SK－7の考察の際には否定的に考えたが、このSK－11に関してはいわゆる風倒木痕である可能性が高いと考えられる。黒色粘質土より若干の縄文時代晩期、弥生時代前期の土器および石鏃1点が出土した。(第26・27図)

3．溝

SD－1（第20図）　C・D－1区で検出した溝で検出長4.2m、幅1.0m、深さ0.45mを測り、底面は平坦である。第4層を除去した段階で検出した溝であるが、その埋土は淡茶灰色粘質土で他の土坑等とは明らかに異なる。遺物の出土は皆無である。

SD－2（第21～23図・図版6）　斜面下端部付近をほぼ南北に貫いて走る溝で、B－1・2区付近では2段に掘られている。その規模は調査区北壁付近では幅1.2m、深さ0.6mを測るが、南にいくにつれて幅・深さを感じ、5ライン付近では幅0.9m、深さ0.25mとなり、それより南ではわずかにくぼみ状に認められるにすぎなくなる。それは北にゆくにつれて旧地形が高くなったために生じたもので、SD－2の底面が高くなったことによるものではなく、底面



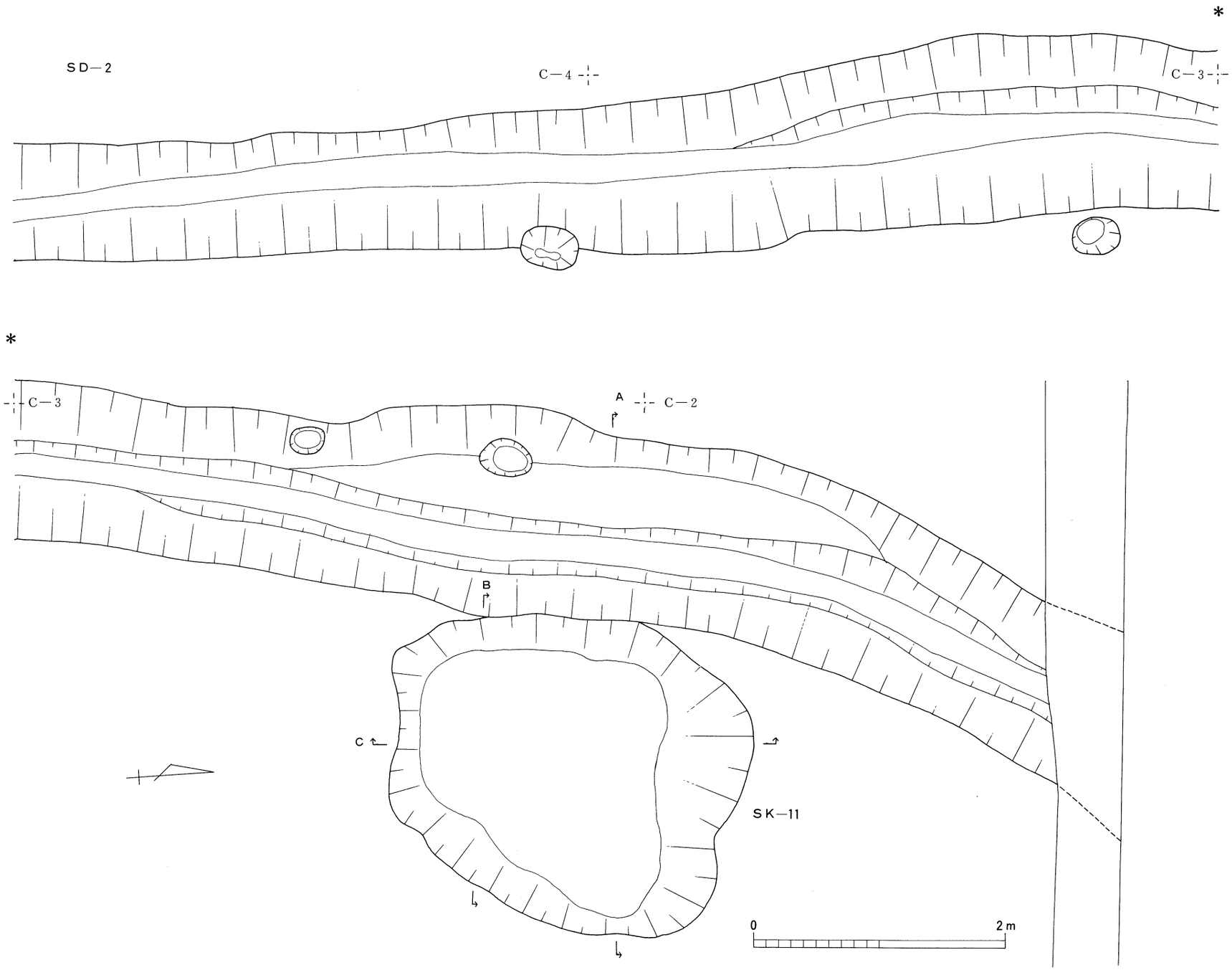
第22図　ＳＤ－２上部大甕出土状態

の高さは41.5m前後で一定している。埋土は基本層序で示した第３層の黒色礫混土が上方からそのまま流れ込んだ状態で堆積している。ＳＤ－２の時期は、埋土中から遺物は出土しなかったものの、調査区北端近くの埋土上面よりやや浮いた形で、第30図に示す桜井谷編年Ⅲ型式前半頃[1]の大甕がしきつめられた状態で出土しており（第22図)、また基本層序第３層自身からも須恵器が出土するため、概ね古墳時代後期、６～７世紀の溝と考えてよいであろう。なお、自然流跡との関係では、自然流路からⅡ型式末～Ⅲ型式の須恵器が出土していることから考えて、両者が同時に存在していたと考えてさしつかえないであろう。ただ、一部に自然流路がＳＤ－２を切る部分があり、ＳＤ－２の掘削は自然流路よりやや遅れるようである。

ＳＤ－２の性格については底面のレベルが一定している点から考えて調査区の北方に自然流路から水を引く導水路であったものと考えられる。ただし、その埋土は先述したように上方から基本層序３層の黒色礫混土がそのまま流れこんだ状態が看取され、常時流水があったとは到底考えられない。おそらく自然流路の灌水時にのみ利用されたものであろう。

４．自然流路（図版７）調査区東壁にほぼ沿う形で検出した古墳時代後期の自然流路である。調査区外にのびるためその規模は不明だが、検出幅約５ｍ、長さ25mを測る。埋土は砂礫と粘質土が互層をなし、流水の激しかったことがわかる。弥生土器（中期）と須恵器が出土した。

注１）．木下　亘「摂津桜井谷古窯跡群における須恵器編年」(『桜井谷窯跡群２－17窯跡－府立少路高等学校建設工事に伴う調査報告－1982・12　少路窯跡遺跡調査団)



第23図　ＳＫ—11・ＳＤ—２平面図

V 遺　物

今回の調査では斜面の各層（1～5層)、ＳＫ—11、自然流路より縄文土器（中・晩期)、弥生土器（前・中期)、須恵器等が出土している。基本層序の項でも触れたが、5・4層が各々縄文時代中期、縄文時代晩期・弥生時代前期の1次的な堆積土であることが各層の出土土器点数を示した第2表からも明らかである。2層は古墳時代までの各時期の遺物を含んでおり、斜面上方の遺物包含層が2次的に流出・堆積した層と考えられる。

第2表　遺　物　出　土　点　数

	縄文中期	縄文晩期	弥生前期	弥生中期	須恵器	土師質土器	陶磁
1　層			20		520	180	5
2　層	24	17	39	4	180	450	
3　層		8	12	2	100	290	
4　層	3	12	22			350	
5　層	12						
自然流路				4	155	25	
ＳＫ－11		3	6			35	

注）土師質土器中には時期を明確にできない縄文・弥生土器等も含まれる。

1．縄文時代中期の遺物（第24図・図版8）

今回の調査では第2・4・5層において約40片の縄文時代中期の土器が出土した。

1は貼付突帯と口縁の間に二枚貝による圧痕を施すものである。

2～8・10は横位施文縄文Ｒを地文とする。文様は直径6㎜前後の竹管の押引文を弧状に施すものが多く、それを突帯の側面に沿わすものもある。4・6では突帯に沿わして連続刺突文が認められる。これらの文様構成は第1次調査のＳＫ—4・5で出土したものと共通する。

9は器面を刷毛で調整した後、2条の沈線を施すものである。

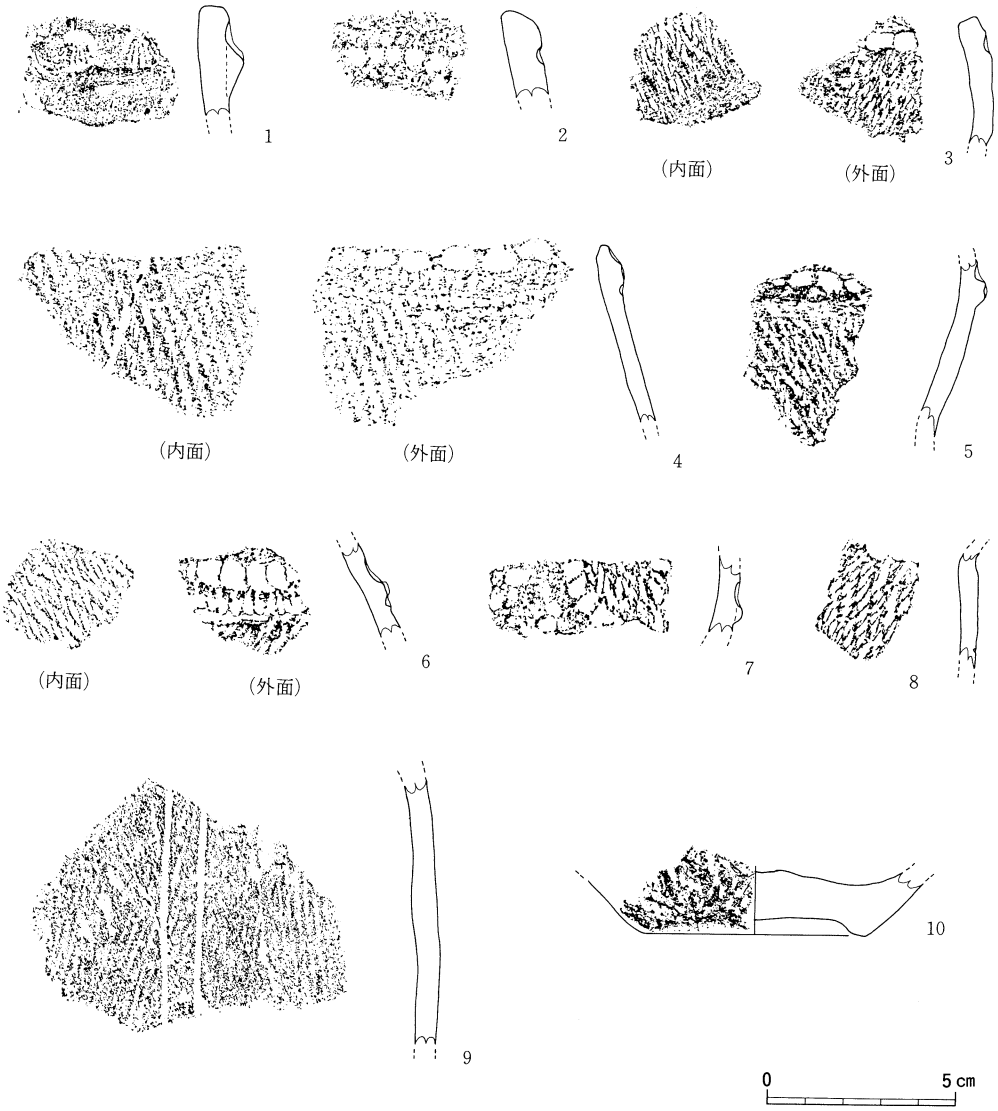
今回出土した土器は層位的な把握は全く不可能であったが、1～8・10は1次調査出土資料同様船元Ⅱ式[1]に属すると考えられる。ただし、1の様に貝殻圧痕を施すものは1次調査では認められなかった。なお、9は貝殻条痕の後に2条の沈線を施すもので里木Ⅱ式[2]に下ると見られ、色調も浅黄橙色で他と趣を異にする。

2．縄文時代晩期の遺物（第25・26図・図版8）

2～4層およびＳＫ—11より縄文時代晩期の突帯文土器が30点余出土した（第2表)。その内訳は壺（1・2)、深鉢（3～16)、浅鉢（17）である。なお、明確に晩期のものと考えられる底部は認められなかった。

1・2は壺で1条の突帯を貼り付けている。1・2の突帯上と1の口縁端部には刻み目が認められるが、1の刻み目は全体に浅く、不明瞭で、2の刻み目はヘラ状工具で小刻みに施されている。

深鉢も口縁端部をやや下ったところに1条の突帯が認められ、口縁端面と刻み目上に刻み目



第24図　縄文土器（中期）実測図

第３表　縄文土器（中期）観察表

	器種	部　位	色調 内面	色調 外面	出土地	出土層位	備　考
第24図１	深鉢	口縁部	灰白色(10YR8/2)	浅黄色(2.5Y7/3)	C－５区	４－ｂ層？	貝殻圧痕
2	〃	〃	橙色（7.5YR7/6）		C－６区	４－ｂ層	刺突
3	〃	〃	橙色(2.5YR6/8)	橙色(2.5YR6/8)	D－６区	２層	縄文(R)横位竹管押引き
4	〃	〃	橙色（2.5YR6/8）		〃	〃	縄文(R)横位竹管押引き刺突
5	〃	〃	明赤褐色（2.5YR5/6）		C－６区	５層	縄文(R)横位竹管押引き
6	〃	〃	橙色（2.5YR6/6）		D－６区	２層	縄文(R)横位竹管押引き刺突
7	〃	〃	明赤褐色（2.5YR5/8）		C－６区	５層	縄文竹管押引き
8	〃	体　部	橙色（2.5YR6/6）		C－４区	２層	縄文（R）横位
9	〃	〃	浅黄橙色（7.5YR7/6）		D－７区	４－ｂ層？	貝殻条痕・沈線
10	〃	底　部	黄灰色(2.5Y5/1)	橙色(5YR6/8)	C－３区付近	？	縄文（R）横位

第25図　縄文土器（晩期）実測図

を施すものが多数を占める。刻み目はヘラをねかせて突帯に押しつけて刻む、いわゆるD字形のものが殆どであるが、12の突帯上・口縁端部、16の突帯上には刻み目が認められない。また、8は帯状の突帯（幅1cm）上にかなり間隔の乱れた刻み目を施し、口縁端面のそれもヘラあるいは棒状の工具を横にすべらせて施したと考えられるなど他の深鉢と趣きを異にしており、4—a層から出土した唯一の資料でもある。なお、16は2条突帯を有する深鉢の体部と見られる。

今回出土した資料は口縁部端面の刻み目、口縁部の突帯の存在などから滋賀里Ⅳ式[3]に属するものが多いが、1・2・12・15・16は船橋式[4]に下るかもしれない。なお、生駒西麓産の胎土を有する土器が数片認められ、全体の10～20%程を占める。

第26図　縄文時代（晩期）・石鏃実測図

18はＳＫ―11・22層より出土した凹基式の石鏃で、長さ1.5㎝、幅1.1㎝を測り、一方の逆しの先端を欠損する。サヌカイト製で、風化がかなり進んでおり、灰白色を呈する。なお、ＳＫ―11からは弥生前期の土器も出土しており、その頃まで下るものかもしれない。

３．弥生時代前期の遺物（第27図・図版９）

弥生時代前期の遺物は１～３層、４－ｂ層およびＳＫ―11から出土している。

１は壺で上・下を浅く削ることによって形成した削り出し突帯を頸部に施し、その上に１条のヘラ描沈線が認められる。８・９・12は甕の口頸部でいずれも４条の沈線を施すが、８・９の口縁端部には刻み目は認められない。10・11・13～16は壺の体部～頸部で、10・15・16には

第４表　縄文土器（晩期）観察表

	器種	部位	色調 内面	色調 外面	出土地	出土層位	備考
第25図 1	壺	口縁部	浅黄橙色（7.5Y R8/4）	灰白色（10Y R8/2）	C － 6	2層	復元口径11.2cm、貼り付け突帯（刻み目）、口縁端面刻み目
2	〃	〃	橙色（7.5Y R7/6）		C － 5	4－b層	貼り付け突帯（刻み目）
3	深鉢	〃	〃（〃　）		C － 1	4－b層	〃　（〃）
4	〃	〃	にぶい橙色（7.5Y R7/4）	橙色（5Y R6/6）	C － 2	4－b層	〃　（〃）口縁端面刻み目
5	〃	〃	にぶい赤褐色（5Y R5/4）		北西トレンチ（試掘）	4－b層	〃　（〃）　〃　生駒西麓産胎土
6	〃	〃	浅黄橙色（7.5Y R8/3）		B － 1 SD－2		〃　（〃）　〃　雲母含む
7	〃	〃	褐灰色（10Y R5/1）	にぶい赤褐色（5Y R5/4）	C － 1	4－b層	〃　（〃）生駒西麓産胎土
8	〃	〃	黒褐色	にぶい黄褐色（10Y R5/4）	D － 1	4－a層	〃　（〃）口縁端面刻み目、全体にくすぶる、雲母多く含む（生駒西麓産胎土？）
第26図 9	〃	〃	橙色（5Y R6/6）		C － 5	4－b層	〃　（〃）口縁端面刻み目
10	〃	〃	にぶい橙色（5Y R7/3）		B － 2 SK－11		〃　（〃）　〃
11	〃	〃	灰黄褐色（10Y R6/2）	にぶい黄橙色（10Y R7/4）	C － 2	4－b層	〃　（〃）　〃
12	〃	〃	橙色（2.5Y R6/6）		C － 1	2層	〃
13	〃	〃	にぶい赤褐色（5Y R5/3）		B － 2 SK－11		〃　（刻み目）口縁端面刻み目？生駒西麓産胎土
14	〃	〃	にぶい黄橙色（10Y R7/4）		南西トレンチ（試掘）	4－b層	〃　（〃）
15	〃	〃	灰黄褐色（10Y R4/2）	橙色（5Y R7/6）	C － 1	3層	〃　（〃）
16	〃	体部	にぶい黄橙色（10Y R7/3）	橙色（5Y R7/6）	南西トレンチ（試掘）	4－b層	〃
17	浅鉢	口縁部	浅黄橙色（7.5Y R8/6）		C － 5	2層	〃　（刻み目）口縁端面肥厚（刻み目）

沈線、13・14には貼付突帯が認められる。なお11にはヘラ描き文が認められる。

今回出土した弥生時代前期の土器は甕の頸部の沈線が４条認められること、貼付け突帯を有する壺の存在することなどから大半は畿内第Ⅰ様式新段階[5]に属するものと考えられ、１次調査のＳＫ－７出土資料の知見と一致する。ただ、削り出し突帯を有する１は中段階のものである。

４．弥生時代中期の遺物（第28図・図版９）

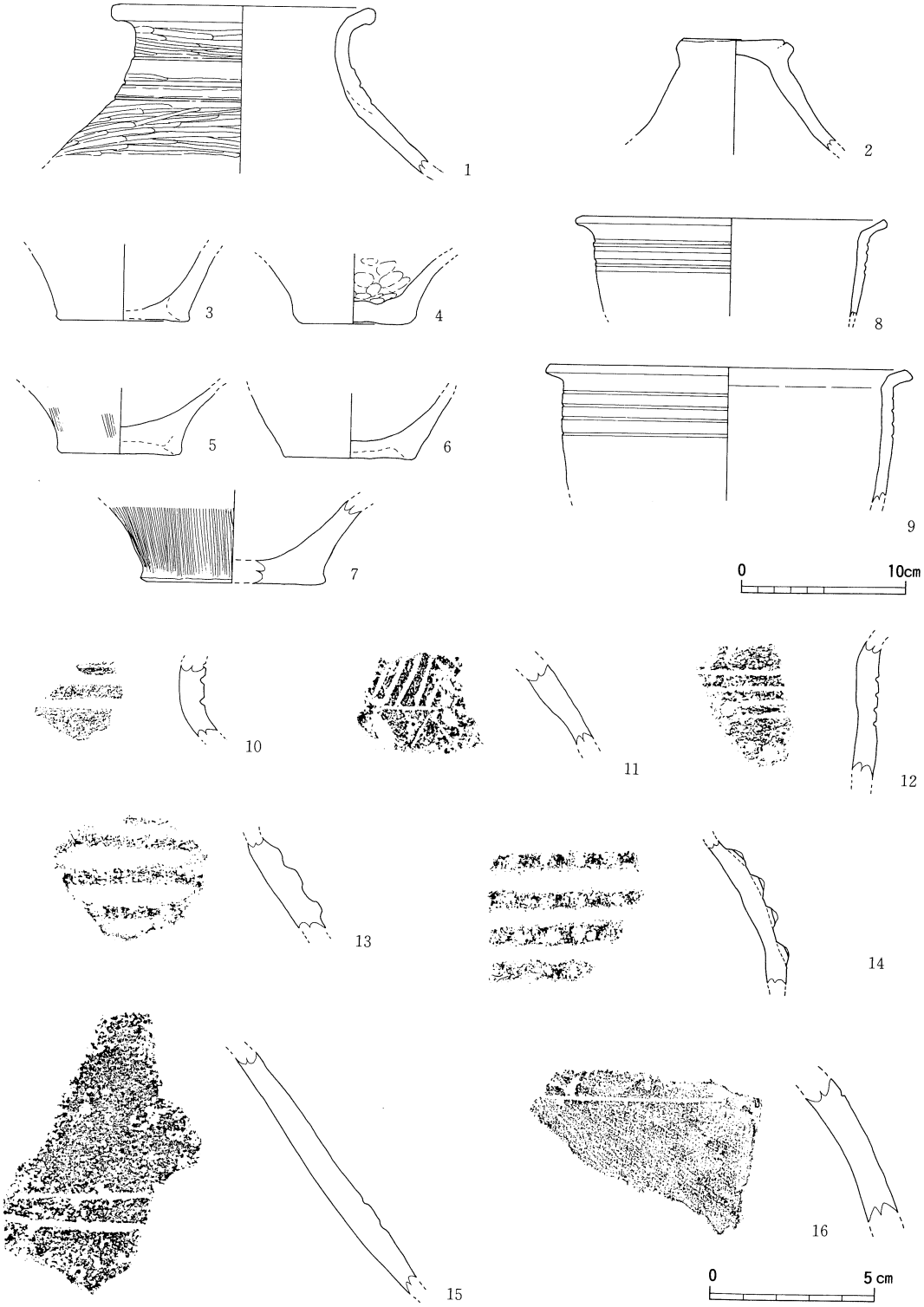
弥生時代中期の遺物は２・３層および自然流路から若干出土している（第28図）。

１は甕の口縁部で端面に刻み目を施し、体部には縦方向の刷毛が認められる。４層の出土であるが、上層の遺物の混入した可能性が強い。２は壺の体部で幅６mm程の櫛描直線文が３帯認められる。３～５は自然流路から出土したものである。３は高杯で、杯部上半のみならず端面にも凹線文がまわり、脚部最上部にはヘラ描きの直線文が認められる。４は甕で、ナデ調整で体部上半部にはヘラ描きの平行斜線文が施され、つまみ上げ状の口縁端面には凹線文が認められる。５は大形の甕の口縁部で内面はナデ、外面は細かい刷毛が認められる。口縁部内面に波状文が施される。

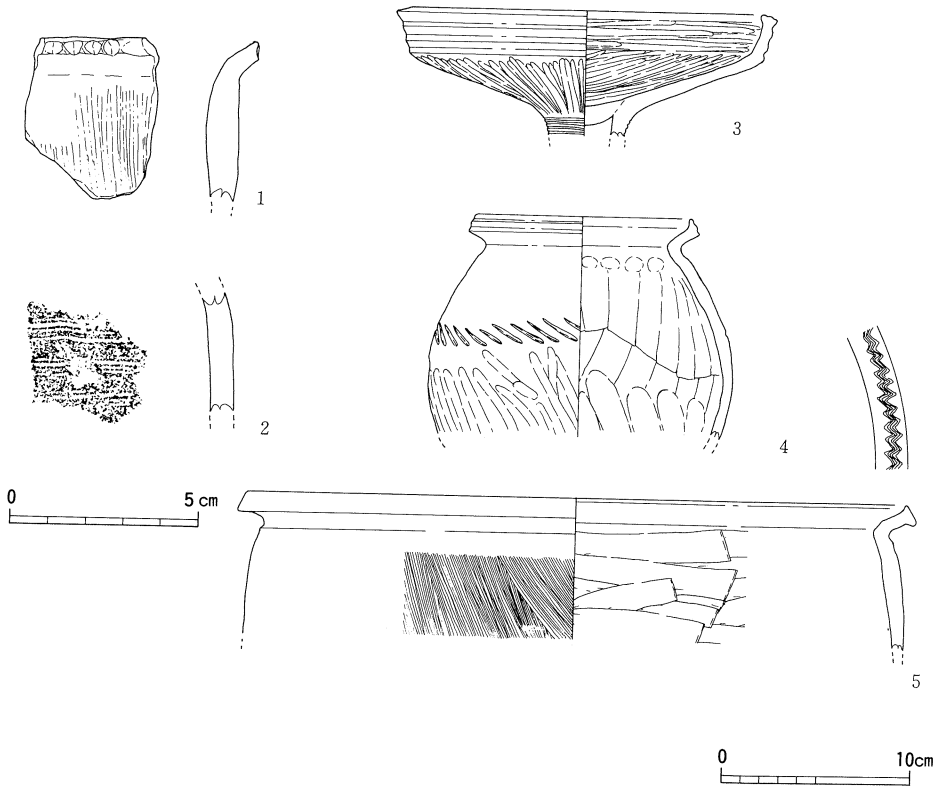
１・２は畿内第Ⅱ様式、３～５は第Ⅳ様式と見てよい。ただし、１・２は各々Ⅰ様式、Ⅲ様式古段階[6]の可能性もある。

５．須恵器・土師器（第29・30図・図版９）

１～３層およびＳＤ－２、自然流路より多量の須恵器が出土した。第29図１～５は杯蓋で、全て自然流路からの出土である。１～３・５は口径12.4～14.5cmを測り、天井部は比較的平坦なものが多いが、５はやや突出気味である。４は扁平な体部にかえりが付くもので天井部は欠損しているが宝珠つまみが付く形式であろう。６～11・13・14は杯身で、うち７～11は自然流路から出土した。６・８～11は口径10.8～12.0cmで、短かく内傾する立上り部が続く。７はやや突出気味の底部から外反して広がる体部に続くものである。13・14は高台を有する。16・17



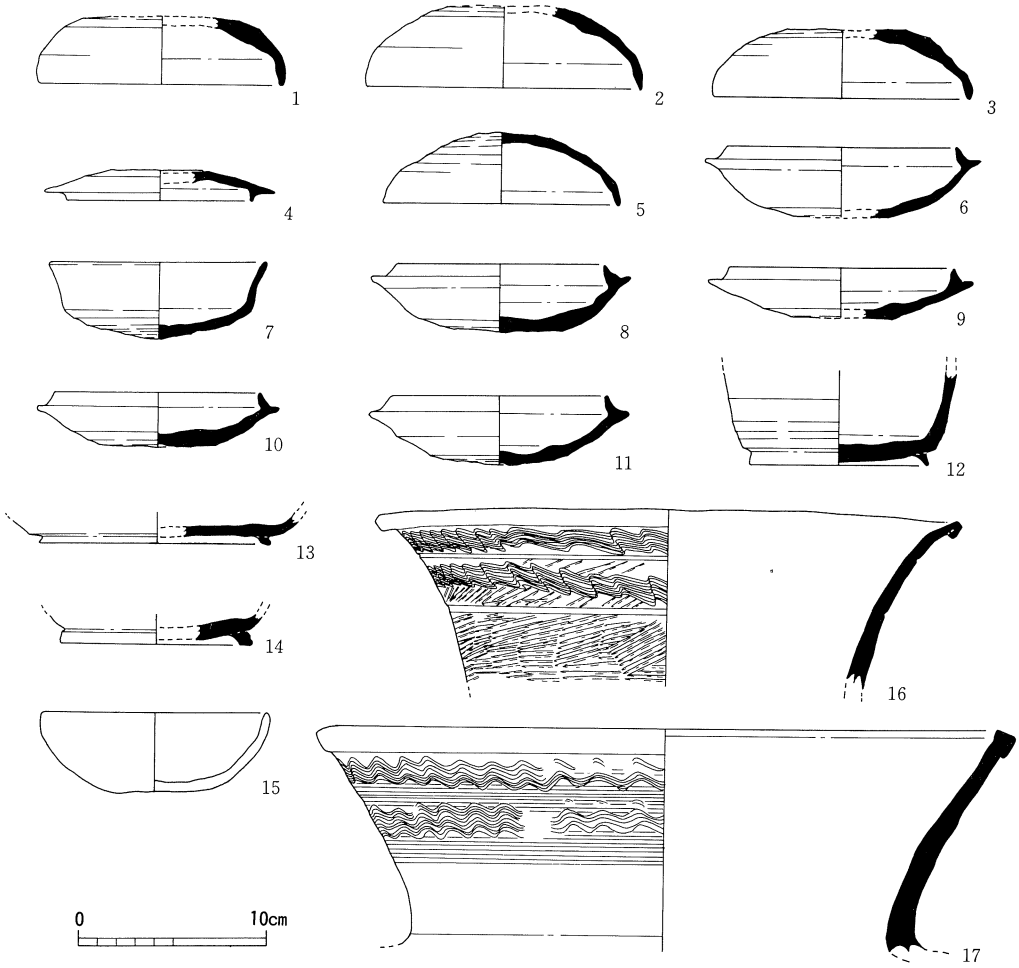
第27図　弥生土器（前期）実測図



第28図　弥生土器（中期）実測図

第５表　弥生土器（前・中期）観察表

	器種	部位	色調 内面	色調 外面	出土地	出土層位	備考
第27図 1	壺	体部～口縁部	橙色（2.5YR6/8）		C－1	3層	復元口径16.0cm削り出し突帯、上に沈線施す
2	甕用蓋		浅黄橙色（7.5YR8/4・8/6）		C－6	2層	天井部径 7.0cm
3	甕	底部	にぶい赤褐色（5YR5/3）		B－2 SK－11		復元底部径 8.2cm　生駒西麓産胎土
4	壺	〃	浅黄橙色（7.5YR8/4）		C－3	2層	底部径 7.2cm　内面指ナデ　磨滅激しい
5	〃	〃	〃（〃）		南西トレンチ（試堀）	4－b層上面	底部径　7.6cm
6	〃	〃	〃（〃）		C－4	2層	底部径 8.0cm
7	〃	〃	〃（〃）		C－6	〃	復元底部径11.0cm　外面刷毛
8	甕	体部～口縁部	浅黄橙色（10YR8/4）		D－7 SP－1		口径22.2cm　沈線４条
9	〃	〃	〃（〃）		北西トレンチ（試堀）	2層	口径19.0cm　沈線４条
10	壺	頸部	にぶい橙色（5YR6/4）ややくすぶる		C－3	4－b層	沈線３条
11	〃	体部	橙色（5YR6/6）		C－5	〃〃	ヘラ描き線刻
12	甕	頸部	浅黄橙色（7.5YR8/4・8/6）		D－1	4－b層	ヘラ描沈線４条
13	壺	体部	灰白色（7.5Y7/1）	浅黄橙色（7.5YR8/3）	C－5	3層	貼り付け突帯３条
14	〃	〃	浅黄橙色（7.5YR8/6）		C－6	4－b層	貼り付け突帯４条　上に刻み目
15	〃	〃	〃（〃）		D－7	4－b層	外面刷毛　ヘラ描き沈線
16	〃	〃	橙色（5YR7/6）		D－5	2層	沈線１条
第28図 1	甕	口縁部	橙色（7.5YR7/6）		C－7	4－b層？	外面刷毛　口縁端部刻み目
2	壺	体部	浅黄橙色（7.5YR8/4）		C－6	2層	櫛描文３帯（原体）幅６mm
3	高杯	杯部	橙色（5YR7/6・7/8）	淡橙色（5YR8/4）	自然流路		口径20cm　内外面ヘラミガキ 凹線文３条　口縁端面２条　脚部ヘラ描き沈線
4	甕	体部～口縁部	浅黄橙色（7.5YR8/4）		〃		復元口径12.2cm　内面板ナデ　外面指ナデ
5	大形甕	口縁部	橙色（5YR7/6）		〃		復元口径約36cm　内面板ナデ？　外面刷毛 口縁端部内面に櫛描波状文　口縁端面凹線文

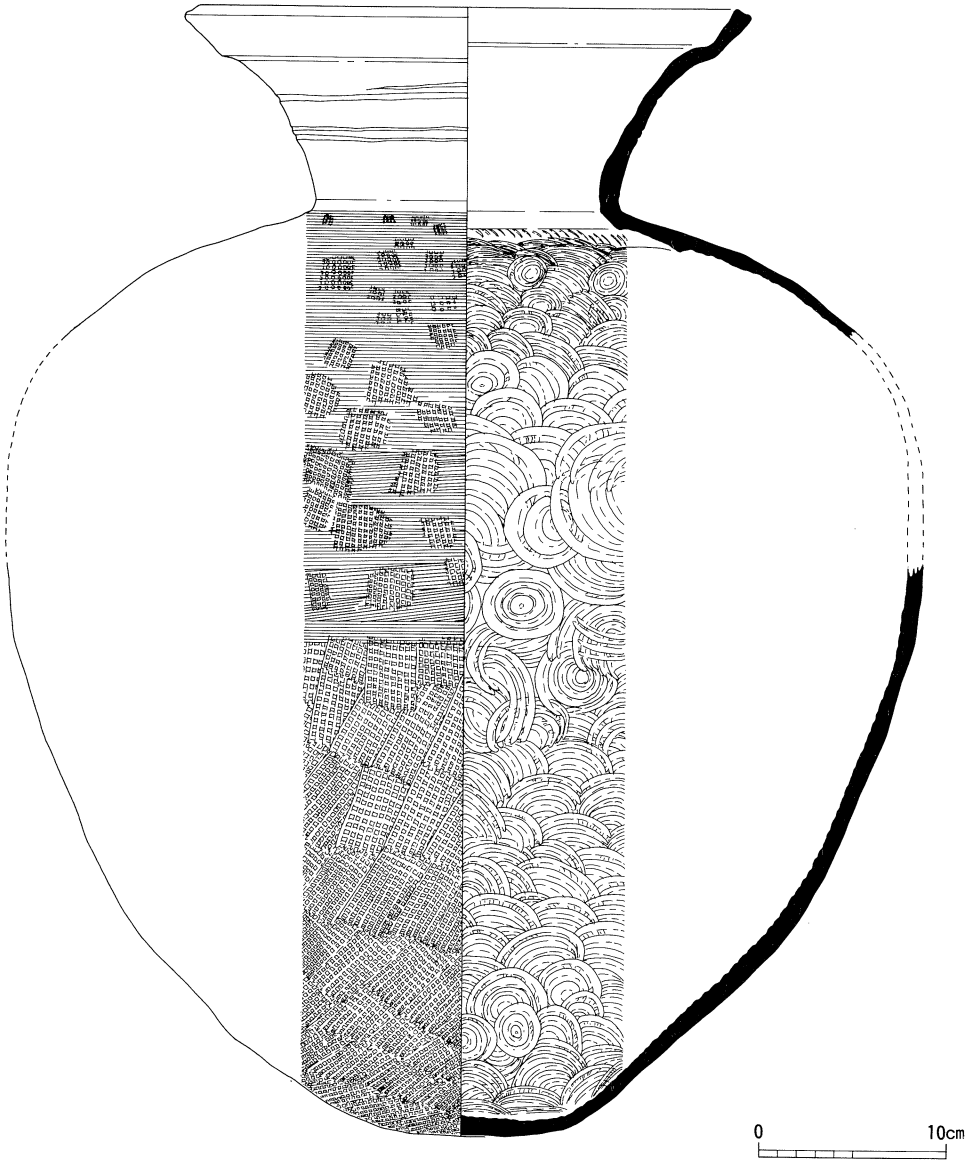


第29図　須　恵　器　実　測　図

は大甕の口頸部で、沈線と櫛描波状文を交互に施し、端部を肥厚させる点が共通する。第30図の大甕はB－1区のSD－2上方で押しつぶされた状態で出土したものである（第22図）。最大径を肩部近くに置く球形の体部から大きく外反する口頸部が続き、その上半は屈曲して広い面を形づくる。体部外面全体を格子状のタタキ原体で調整後、上半部はカキ目を施す。口縁部は2条1単位の沈線が2帯認められる。

これらの須恵器は概ね桜井谷編年のⅡ型式4・5段階からⅢ型式前半[7]、実年代では6世紀末から7世紀前半のものと考えられ、自然流路もその頃のものと見てよいだろう。ただ、第30図の大甕のように口縁部に幅広い面を持つものはⅢ型式前半[8]に見られるものであり、13・14は奈良時代前半まで下ると考えられる。

注1）　間壁忠彦・葭子『里木貝塚』（倉敷考古館研究集報第7号）1971
　2）　　同　　上



第30図　須　恵　器　実　測　図

注３）　『湖西線関係遺跡調査報告書』　湖西線関係遺跡発掘調査団　1973

４）　佐原　真「縄文式土器」『平安学園船橋遺跡の遺物の研究』　昭和36年

５）　『弥生式土器集成　本編２』　昭和43年

６）　同　上

７）　木下　亘「摂津桜井谷古窯跡群における須恵器編年」『桜井谷古窯跡群２―17窯跡―府立少路高等学校建設工事に伴う調査報告』　少路窯跡遺跡調査団　1982.12

第６表　須恵器・土師器観察表

	器種	法　部	色　調	出土地		備　部
第29図 1	杯蓋	復元口径 12.9cm 残存高 3.5cm	灰白色（N7/ ）	A－7 自然流路		やや歪む天井部から丸く終わる端部に続く。
2	〃	復元口径 14.5cm 残存高 4.3cm	灰色（N5/ ）	A－7 自然流路		端部丸く終わる。
3	〃	口　径 13.6cm 器　高 3.7cm	灰色（N6/ ）～ 灰白色（N7/ ）	A－4 自然流路		歪みの激しい天井部から外方に広がる口縁部が続き、端面は丸く終わる。
4	〃	復元口径 12.1cm 残存高 1.6cm	灰白色 （N8/ ～7/ ）	自然流路		端部、かえりとも薄く比較的鋭い。かえりはやや内傾する。
5	〃	復元口径 12.4cm 器　高 3.8cm	灰白色 （2.5Y8/1）	自然流路		天井部からなだらかに下り、端部丸い。焼成不良で軟質
6	杯身	復元口径 12.6cm 器　高 3.7cm	灰白色（N7/ ）	B－7	?	体部～受部はなだらかに広がり、立上りは短く内傾する。受部・立上り端部は比較的鋭い。
7	〃	復元口径 11.5cm 器　高 4.1cm	〃（〃）	自然流路		やや突出気味の底部から屈曲した後外反して広がる体部が続く。端部丸く終わる。焼成甘い。
8	〃	復元口径 11.0cm 器　高 3.6cm	灰色(10Y8/)～ 灰白色（N7/ ）	B－4 自然流路		体部～受部はなだらかに広がり、受部端部は丸く終わる。立上りは厚く、その端部はやや鋭い。焼成不良
9	〃	復元口径 11.8cm 残存高 2.7cm	灰白色（N7/ ）	A－3 自然流路		体部は扁平で、受部は厚く丸く終わる。立上りは直立し、端部は比較的鋭い。受部・立上り接合部外面に不明瞭な沈線巡らす。
10	〃	復元口径 10.8cm 器　高 2.9cm	灰色 （N6/ ～5/ ）	A－4 自然流路		やや凹凸の目立つ体部から水平方向に伸びる受部が続き、その端部は丸い。立上りは内傾し、端部は丸い。
11	〃	復元口径 11.4cm 器　高 3.6cm	灰白色（N7/ ）	A－7 自然流路28層		やや凹凸の目立つ体部から厚く、短かい受部・立上り部が続き、各々の端部は丸い。
12	椀	復元底径 9.4cm 残存高 4.9cm	灰色（N6/ ）～ 灰白色（N7/ ）	D－3	1層	全体に厚く、体部は丸みをおびる。高台は下外方に短かくのび、端部はやや丸みをおびて終わる。底部内面ナデ。
13	杯身	復元底径 12.2cm	灰色（N5/ ）	A－4	?	高台は短かく、接地面は外方に押しつぶされたような形状を呈する。
14	〃	復元底径 10.2cm	灰白色（N7/ ）	F－4	1層	高台は厚く、下外方にのび、接地面も広い。体部・高台接合部外面に２条の浅い沈線が巡る。
15	椀	口　径 12.1cm 器　高 4.2cm	黄橙色(7.5YR8/8) ～浅黄橙色 (7.5YR8/4)	B－5 自然流路19層		土師器。磨滅激しい。平底の底部から丸い体部が続き、端部近くは直立あるいは内傾気味である。
16	大甕	復元口径 31.0cm	赤褐色（10R5/4）	B－6 自然流路上面		回転ナデ後、平行タタキを施す。端部は折曲げ状に丸く肥厚する。頸部上半に２条の沈線の後、乱れた波状文（２条）施す。
17	〃	復元直径 36.8cm 口縁部高 9.7cm	外:灰色(N4/) 内:灰白色(N7/)	?	1層	極めて浅い沈線を２条施した後に波状文（２条）を巡らす。
第30図	〃	復元口径 30 cm 復元体部径 49 cm 復元器高 60 cm	灰白色（N7/ ） 黒斑内外面に残る。	B－1 SD－2上方		体部は球形で最大径は中央やや上方で、底部はわずかに平底気味である。口径部は大きく外反し、端部近くで一旦屈曲し、広い面を形成する。端面は広く、凹線状を呈する。口縁部に２条１単位の沈線を２単位施す。体部格子状タタキの後上半部カキ目。内面青海波文。

Ⅵ．まとめ

今回の調査では、縄文時代中・晩期、弥生時代前・中期そして古墳時代、奈良時代の遺構・遺物を確認した。以下、今回の調査の知見を１次調査の成果[1]も踏まえてまとめてみる。

１．縄文時代中期

今回の調査では斜面に堆積した第５層を中心に若干の土器片が出土した。それらは第１次調査で出土した土器片同様船元Ⅱ式[2]に属すると考えられるが、里木Ⅱ式[3]と見られるもの（第24図９）も１点出土した。

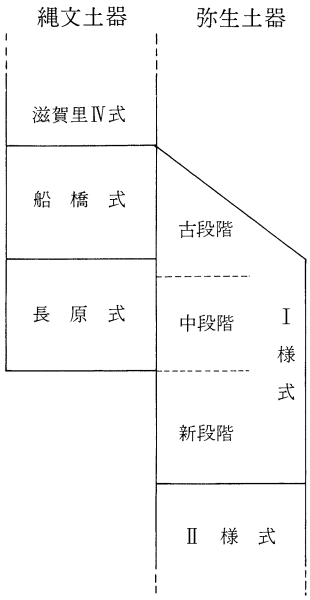
斜面下端部付近で検出した２基の土壙墓は『第１次調査報告』で第Ⅰ類に分類した土壙墓に形態等で極めて類似する。埋土に礫を有している点でも共通し、特に今回検出した２基ではそれが顕著に認められた。ただ、『第１次調査報告』のまとめではそれらの礫を墓坑上面に配されていたものを考えたが、今回検出したＳＸ－１などではかなり大量の礫が墓坑底面近くのレベルまで認められ、遺体の腐敗に伴なう配石の陥没とするには墓坑上面からのレベル差が大きすぎるように思える。墓坑埋土に礫を配していた可能性も考えねばならないであろう。第１次調査同様、土壙墓からの遺物の出土は皆無であり、層位も表土を重機で掘削した段階で検出したため、斜面に堆積した４・５層との関係は不明である。したがって、第１次調査同様年代を決定する要素には恵まれなかった。ここでは縄文時代中期、あるいは縄文時代晩期・弥生時代前期の土壙墓群が河岸段丘の段丘崖を挟んだ上下に形成されていたことが確認されたと述べるととどめておきたい。

２．縄文時代晩期

２・4層を中心に晩期後半の突帯文土器が数十片以上出土した。それらの多くは口縁端部からやや下っさ部分に刻み目を施した貼り付け突帯を巡らし、口縁端面にも刻み目を施することから大半は滋賀里Ⅳ式[4]に属すると考えられる。ただ、少量出土した壺あるいは２条突帯の深鉢は船橋式[5]に属すると見られる。

３．弥生時代前期

２・４層を中心に100片以上が出土した。その多くは畿内第Ⅰ様式新段階のものと考えられるが、少量ながら出土した削り出し突帯を有するものなどは中段階までのぼると見てよいであろう。



第31図　縄文晩期後半～弥生中期初頭の土器編年

さて、近年大阪府周辺においても突帯文土器から前期弥

生土器への移行期の土器編年が進みつつある。[7] 現在までの知見では滋賀里Ⅳ式には弥生土器は見られず、逆に畿内第Ⅰ様式新段階と縄文土器の一括出土例は知られていない。また、長原式と第Ⅰ様式中段階の共伴例が多く認められることから、船橋式・Ⅰ様式古段階の位置付けがまだ流動的であるものの、ほぼ第31図のような平行関係が考えられている。1・2次調査で出土した当時の土器の大半は滋賀里Ⅳ式とⅠ様式新段階であり、両者の併存は考えられない。ただ、少量出土している船橋式と第Ⅰ様式中段階の土器を考慮するならば野畑春日町遺跡では縄文時代晩期後半から弥生前期末、あるいは中期初頭（Ⅱ様式期）まで、ほぼ継続的に集落が営まれた可能性も出てきた。なお今回の調査においても当時の生業形態を知る資料は1点の石鏃以外は何も確認できなかった。

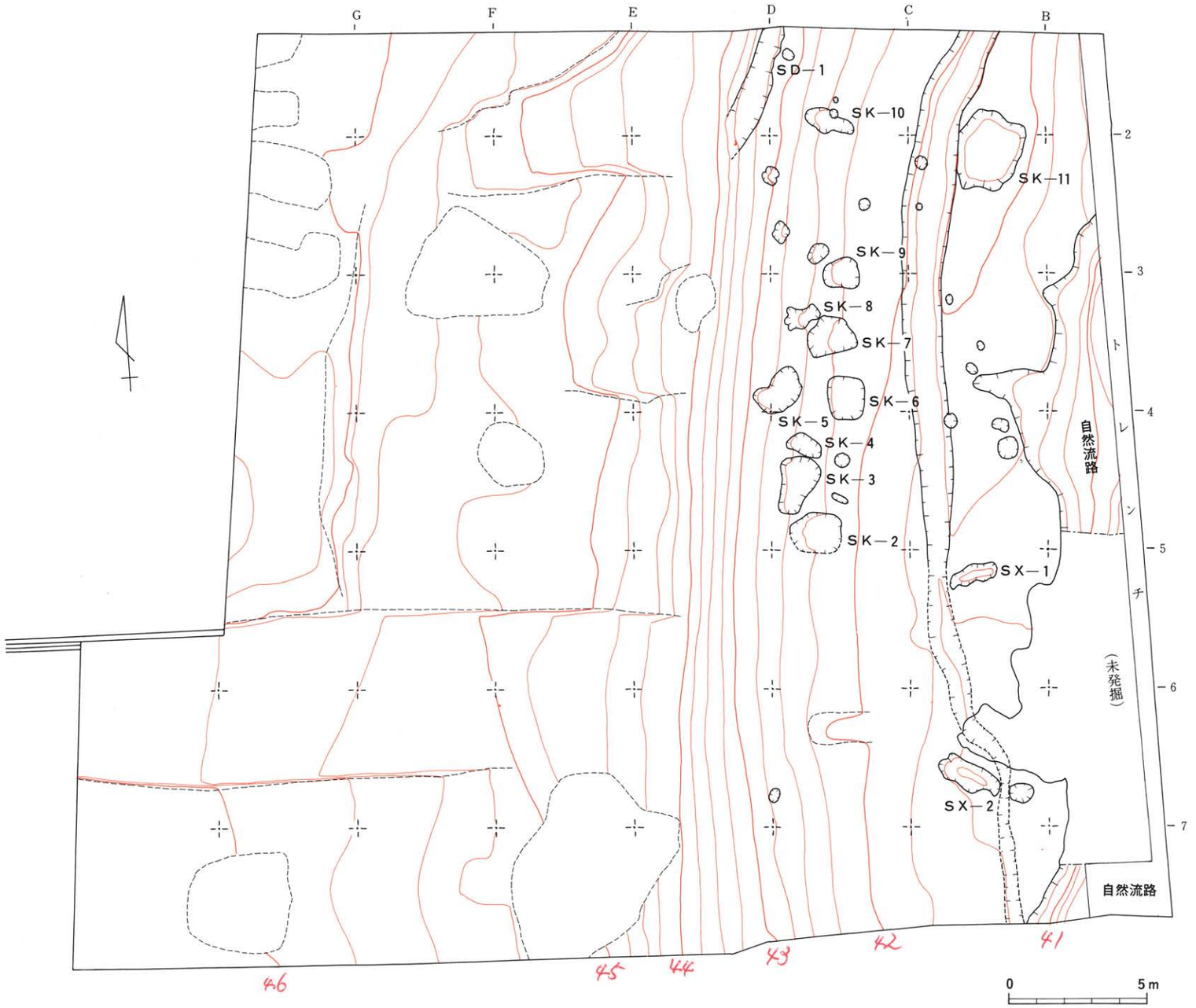
4．弥生時代中期

弥生時代中期の遺物はごく少量の第Ⅱ様式と考えられる土器片と、第Ⅳ様式の土器[8] が出土し、かって藤沢一夫氏が指摘したとおり、当遺跡が弥生時代中期の遺跡であることが改めて確認された。第Ⅳ様式の土器は全て自然流路からの出土であり、第1次調査地点も含めて他からは全く出土していないことから考えて、当時の集落は自然流路の上方（北方）にその中心があったと推定される。ただし、それらの土器は殆ど磨滅していないことから考えて、当時の集落と今回の調査地点の距離は大きくないと見られる。

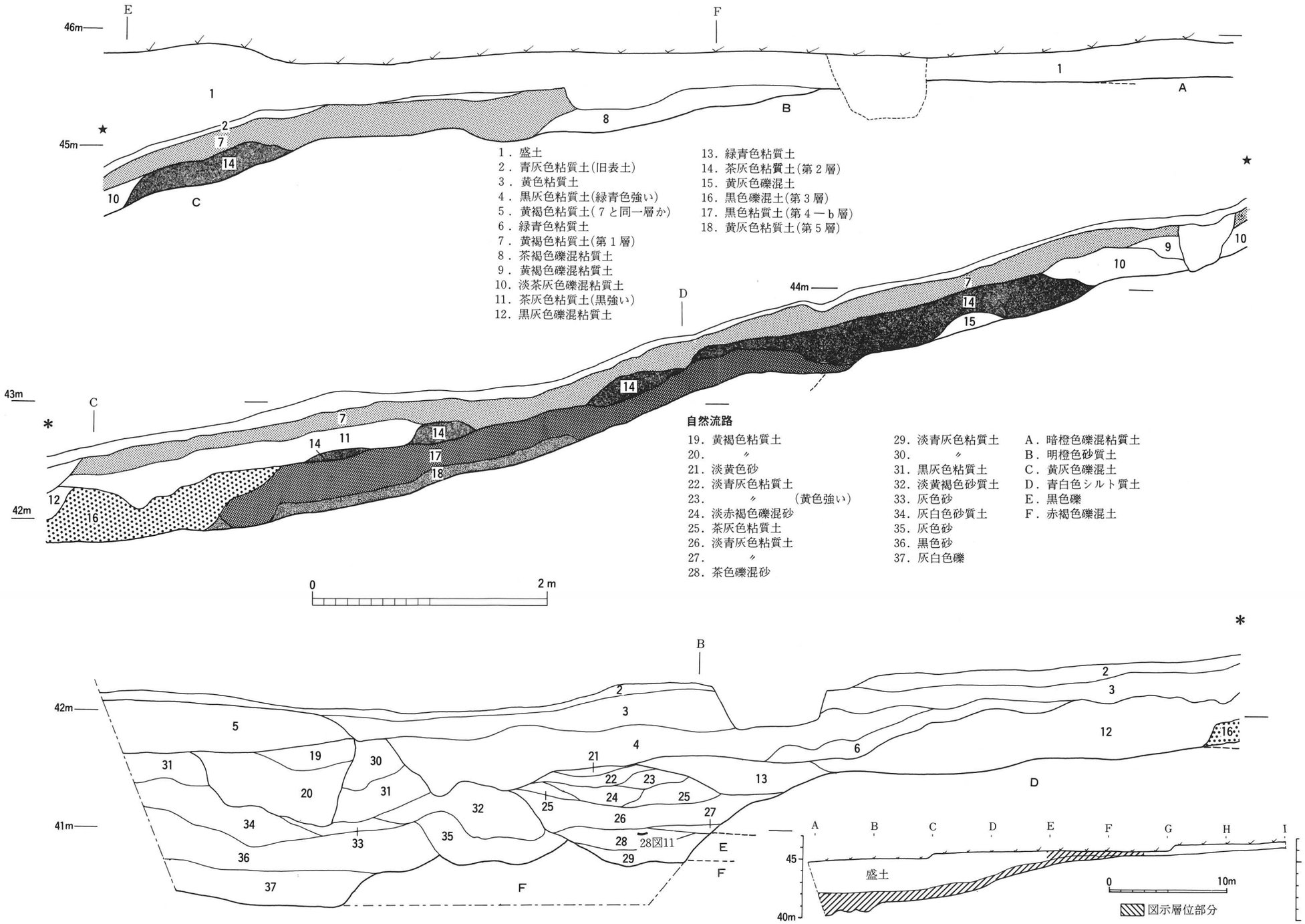
5．古墳時代以降

1～3層より多量の須恵器・土師器が出土したが、遺構はＳＫ―１・ＳＤ―２そして自然流路に限られる。自然流路は弥生土器（中期）も出土したが、殆どは桜井谷編年Ⅱ型式4段階～Ⅲ型式前半のもので、[9] ほぼ、古墳時代後期6世紀末～7世紀前半の流路と見て大過あるまい。また、2層は前述したように縄文・弥生土器と須恵器・土師器を多量に含む有機質の層であり、おそらく上方（西方）の各時代の包含層が古墳時代後期に大幅に（おそらく人為的に）、削平された際に形成されたものと考えられる。1次調査で縄文・弥生時代の遺物包含層が全く認められなかったこともそれを傍証している。また、図示しなかったが陶棺片と見られる須恵器が若干出土しており、かって周周に存在した野畑春日町古墳群[10] が陶棺を有する後期古墳であったことも考慮する心要がでてきた。

注1）『野畑春日町遺跡　―第1次調査報告書―』　野畑春日町遺跡発掘調査団　1987.3　以下『第1次調査報告』と略す。
2）間壁忠子・葭子『里木貝塚』(倉敷考古館研究集報第7号)　1971
3）　同　上
4）『湖西線関係遺跡調査報告書』　湖西線関係遺跡発掘調査団　1973
5）佐原　真「縄文式土器」(『平安学園船橋遺跡の遺物の研究』)　昭和36年
6）『弥生式土器集成　本編2』　昭和43年
7）『縄文から弥生へ』　帝塚山考古学研究所　1984
8）　→　6）
9）木下　亘「摂津桜井谷古窯跡群における須恵器編年」『桜井谷窯跡群2―17窯跡―府立少路高等学校建設工事に伴う調査報告―』少路窯路遺跡調査団　1982.12
10）『豊中市史』第1巻　1961.3


G
F
E
D
C
B
SD－1
SK－10
SK－11
SK－9
SK－8
SK－7
SK－6
SK－5
SK－4
SK－3
SK－2
SX－1
SX－2
自然流路
トレンチ
（未発掘）
自然流路
2
3
4
5
6
7
46
45
44
43
42
41
0
5m

第32図　調　査　区　全　体　図



第33図　調査区断面図（調査区南壁）

図　　版

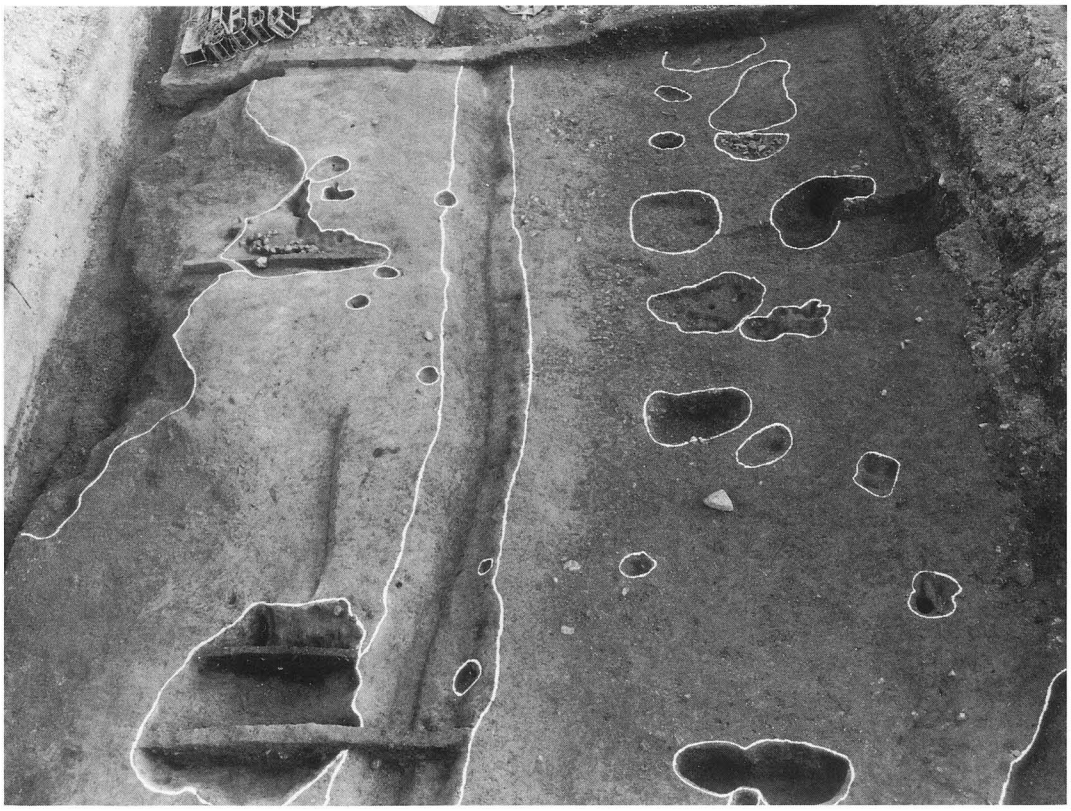
図1版

(1) 調査区遠景（東より　手前の森が千里川）

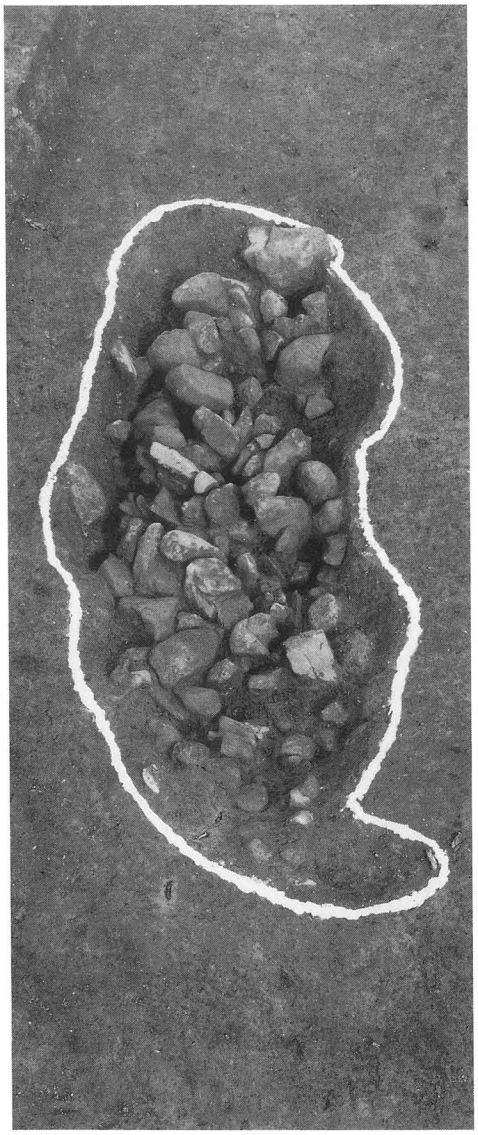
(2) 調査区全景（西部）

図2版

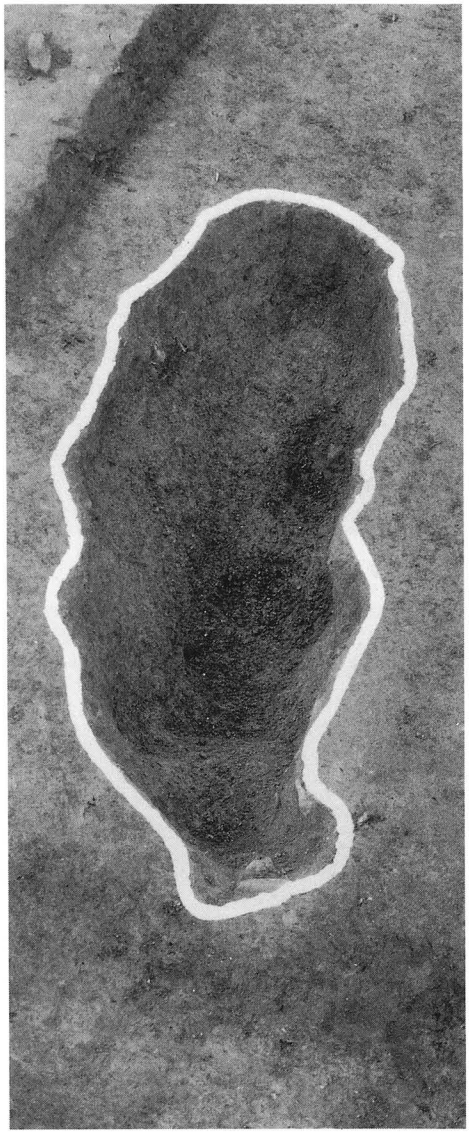
(1) 調査区全域（南東部）



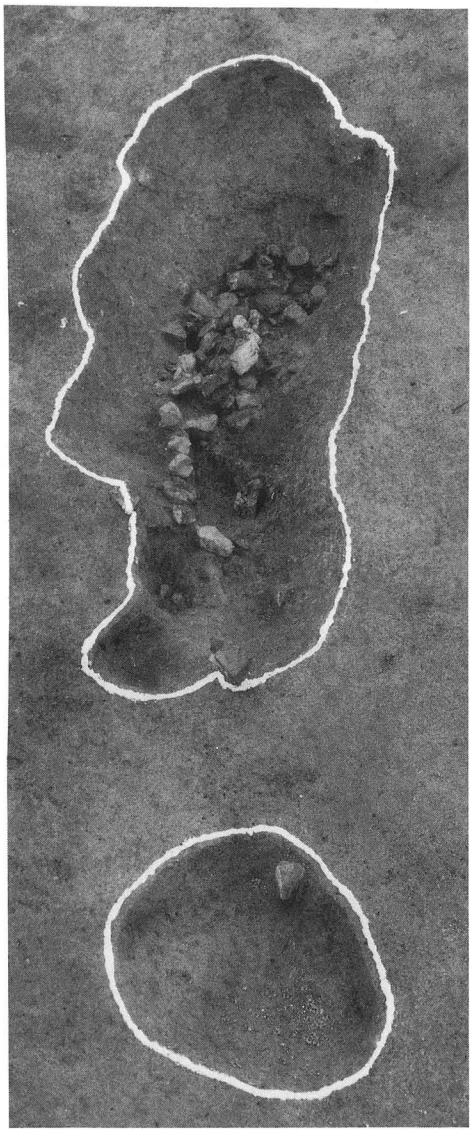
(2) 調査区全景（北東部）



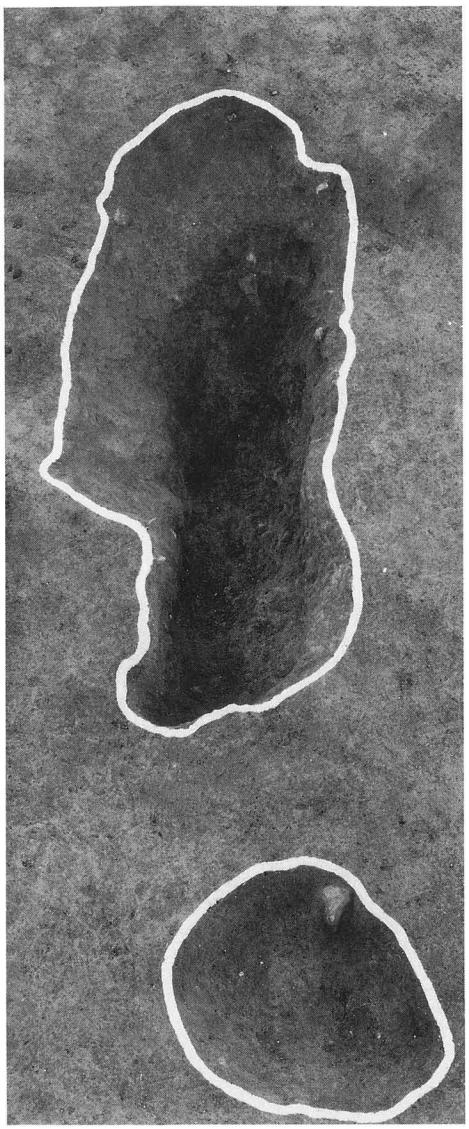
(1)　ＳＸ－１（礫除去前）



(2)　ＳＸ－１（礫除去後）

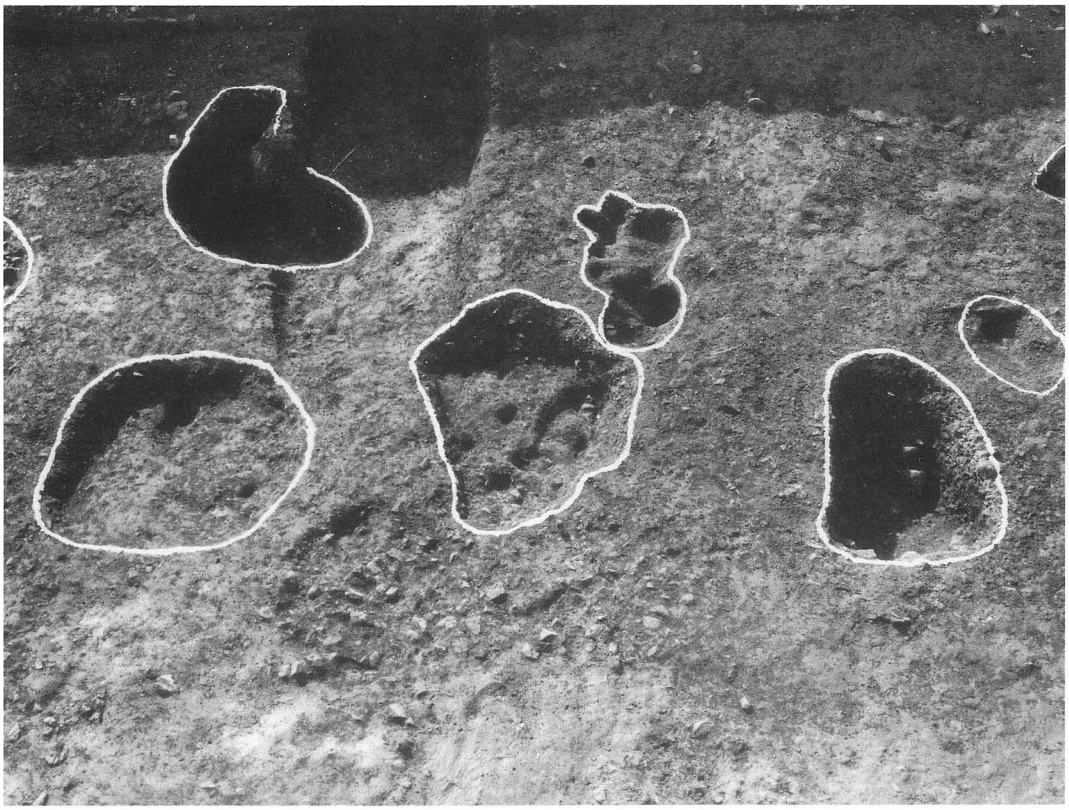


(1)　ＳＸ－２（礫除去前）



(2)　ＳＸ－２（礫除去後）

(1) ＳＫ－１（南より）

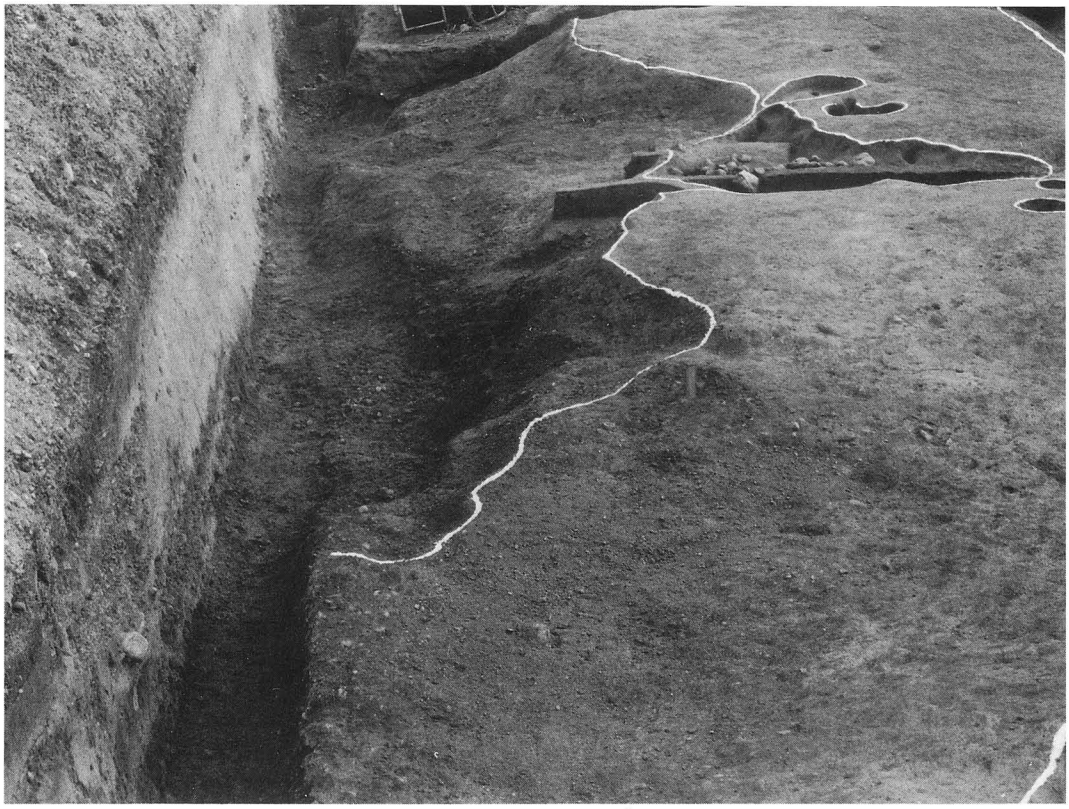


(2) ＳＫ－５～９（東より）

(1)　ＳＫ―11（南より）

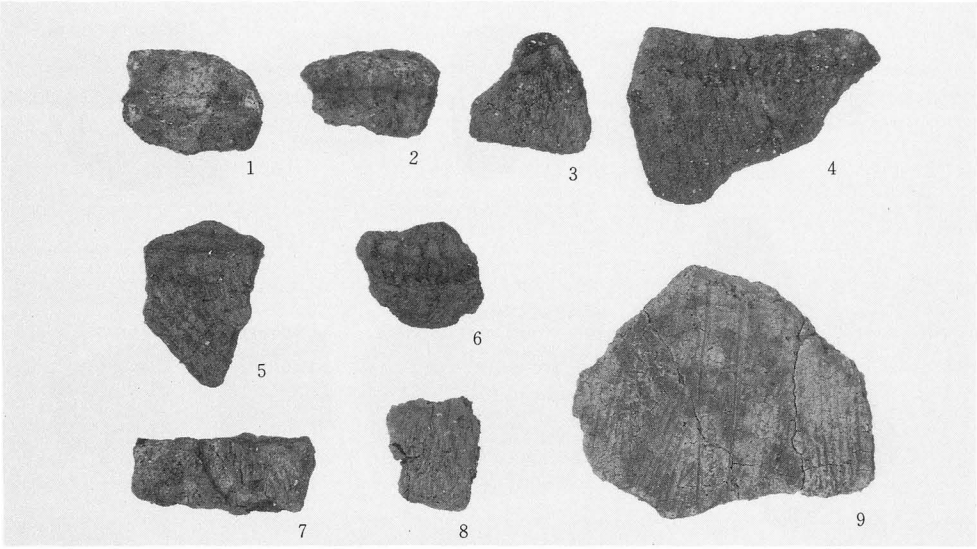
(2)　ＳＤ―２断面

図版7

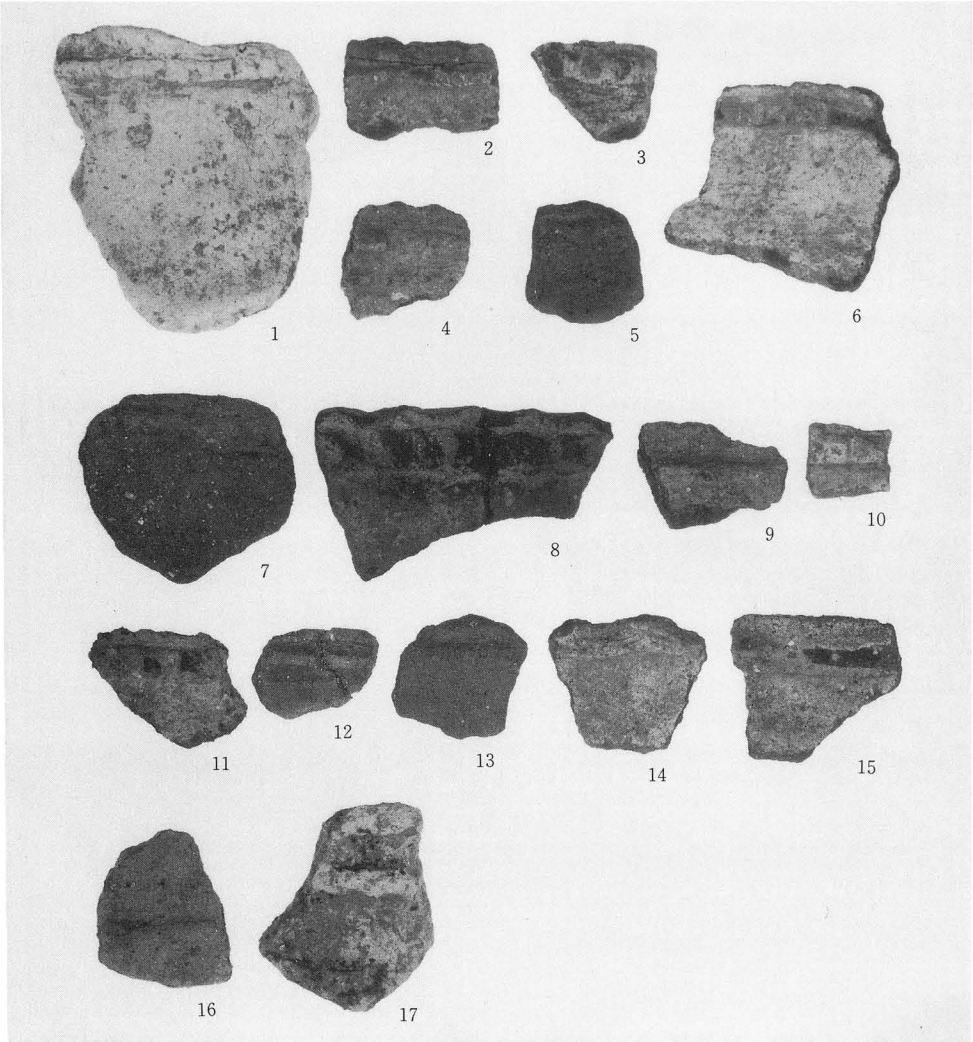


(1) 自然流路（北より）

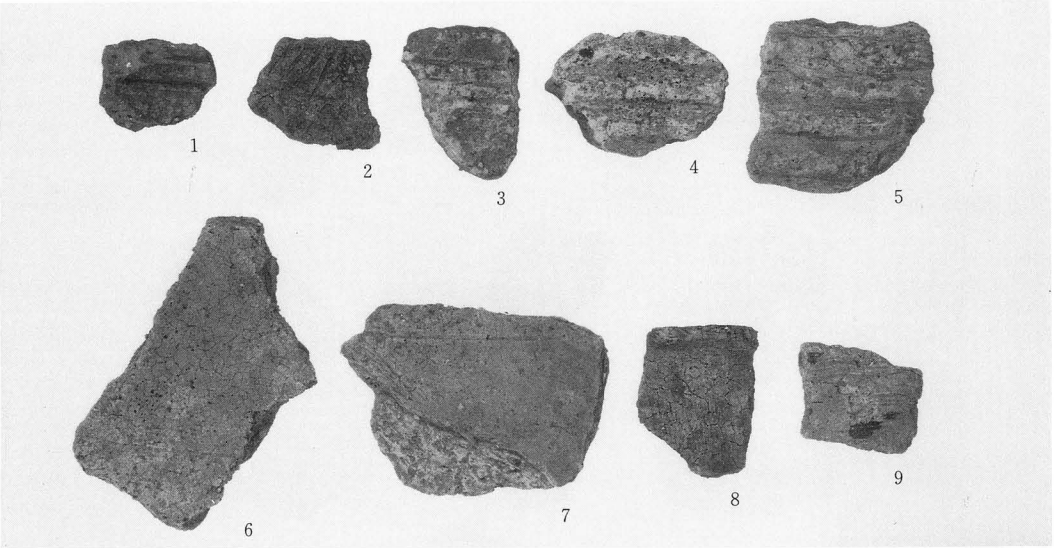
(2) 自然流路断面（調査区南壁）

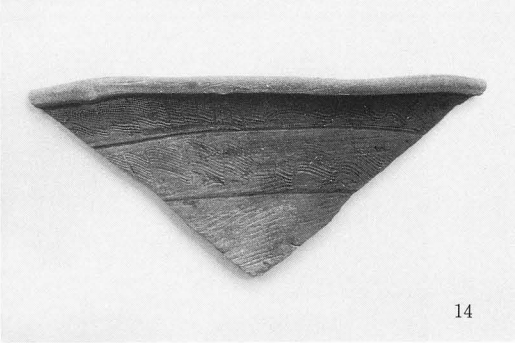


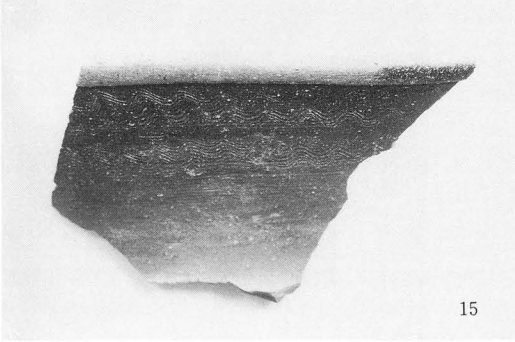
(1) 縄文土器（中期） 数字は第24図と一致



(2) 縄文土器（晩期） 数字は第25・26図と一致







弥生土器・土師器・須恵器　1～7:第27図10～16,8・9:第28図1・2,10:第27図1,11:第28図3,12～15:第29図12・15～17

豊中市文化財調査報告　第23集

野畑春日町遺跡

—第２次調査報告書—

1988年３月

発行　野畑春日町遺跡発掘調査団

編集　豊中市教育委員会社会教育課

印刷　株式会社　中島弘文堂印刷所